
創造主の異世界旅行

餡子入りパスタライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

創造主の異世界旅行

【Nコード】

N0601L

【作者名】

餡子入りパスタライス

【あらすじ】

《創造》できる神様の話。

星は作れても人は作れないそんな神様の異世界旅行。最強であるがあるがゆえに孤独の辛さを知っている。星を超え、時空を超え、長い年月を過ごしてきた、《創造破壊神村上》の物語

創造主の異世界旅行 1話

外見14才であり黒髪で肩まで掛かる長さであり両眼の色が黒。少年が一人ブツクサ言いながら次元回廊を漂っていた。

「そつだ、異世界旅行をしよう」

試しに銀河を創ってみたものの失敗に終わってしまった。

銀河自体作り上げることは容易であったが、どうしても星に人間そのものが産まれなかった。

人間以外なら出来たのに……。

我ながら泣けてくる

2

途中破棄で悪いけど、この銀河見捨てさせて貰う。

消滅はさせないけど創造主である僕 村上晶 はこの世界から姿を消す。

そのため僕はこの世界に管理者を置くことにした。

「命名、《生物神》で良いか」

我ながら絶望的なネイミングセンスである。

「形は世界修正に任せて、力の程は僕の身体の一部で良いか」

髪を一本抜き、それに《進化》《創造》《繁栄》三つの固定の概念を乗せ、もう見ないであろう世界を見渡す。

「親は去る。この世界を見捨てて。さらば我が世界、後は《生物神》に任せて我は行く」

抜いた髪を世界に向けて放り投げた。

「さらばだ!」

我ながらカツコつけ過ぎな気がしなくも無い。

傍から見れば痛い子とも思える光景だが、人がいないので、そんなことを考えるだけ無駄であることは百も承知。

だけど100兆の長い年月の孤独は辛いです。

そして《創造主》村上晶は次元回廊から姿を消した。

「ここが異世界か……。風景だけなら僕の星と変わらないね」

現状確認のため周りを見渡すと、木がいつぱいで覆われていた。森の様で、あつちこつちから鳥の鳴き声や獣の唸り声など、自然に本来有るべき形が此処にはあった。

4

「これだけ自然がいつぱいってことは、生態系は確かに存在していることになるわけか……。……人はどこにいるかな」

いなかったら絶句もんである。

「とりあえず、森を抜けてみないことには始まらないかな」

しばし自問していると、遠くから地響きが聞こえてきた。

「とりあえず、地響きした方に行ってみよう」

別にこの森を抜けれはどこでもいいし、さっきの地響きには少し興味があったので、自分の勘を頼りに進む事にした。

「これでただの地震とか、デカイ岩が高台に落っこちただけとかだったら、僕は泣いちゃうかも。……精神的な意味で……」

少し歩くと、さらに地響きが大きくなり、さらには人(?)の叫び声まで聞こえてきた。

「人は居る可能性は高いかな、希望が持てそうです。拝啓《村上晶》」

かなりの壊れっぷりに自分で内心驚きつつ、目標地点に着くまでの間自分の世界に入っていた。

「まず人にあつたら「おはようございます」かな、それとも「こんにちは」かな、あまりにも人と会ってないから、社会機能停止した自分に自信が持てない。会つたらまず笑顔だよね！それからそれから、話したい事がいっぱいあるんだよ！」

100兆年の孤独は辛い。星を創つては失敗し、人を造つては失敗し、自分の孤独を埋めようと必死だった。

何度人を造つても、出来たのはただの理性の無い野獣だった。

どうしても人に《理性》と《知識》が芽生えなかったのだ。

だから僕は願う、もう一度人に会いたいと

だから……。待ってくれ。

そこには、自分でも創りあげることが出来なかった知性体。

無意識の内に走り出す。ところどころぶつかつたところは有るみたいだったけど、それよりも確認しないといけない、この先に僕が望むものが有るかどうか。

さらに地響きは大きくなっていくが、対照的に人(?)の叫び声は小さく少なくなっている。

助けに行くから。ほんのちょっとだから。待ってくれ。逝かないでくれ。話したい事がいっぱいあるんだ。

「だから、逝かないで!!!!!!」

そして森を抜けた。

創造主の異世界旅行 1話（後書き）

駄文ですがお願いします。

創造主の異世界旅行 2話

森を抜けた先は草原だった!!

なんて落ちは無く。

目の前には、全長20〜30m程の緑色のドラゴンがいた。

突然過ぎる登場物にかなり驚いた。

……なので……。

「あっせー……」

なんの魔法の強化もかけず、全力で殴ってやった。

殴ったドラゴンは跡形もなく消え去り、土に還ったと思う。

だが、そんな事よりも、今は叫び声を上げた生物が、僕の知っている人であるかどうかの方が重要である。

周りを見渡すと、ロープに身を包んだ少女がそこには居た。

そのロープの少女は身長140程で深紅の髪色で、右眼は金色、左眼は深紅のオットアイである。

あまりのことに感動しそうになったが、ここで泣けば確実に変態のレッテルを張られそうなので、落ち着いて対処にあたろうと思う。

しかし、さっきからロープの少女がこっちを凝視してきている。

僕的には落ち着かないけど、しかしそんなことではめげない。

とりあえず第一接触を試みましょう。

「こんにちは、僕の名前は村上晶。君の名前は？」

傍から見れば怪しい人に見えなくともない。

輝かしいばかりであろう笑顔を、ロープの子に向けてみた。

「~~~~~っ!~!~!」

なんとも可愛いらしいじゃないか。と心の中で思ったりした。

ロープで顔は見えないが、ちゃんと乙女らしい反応してくれた。

久しぶりの人間の反応に、内心感動です。

「私の名前はエリス＝クウデイスと言います。さっきはグリーンドラゴンから助けて下さりありがとうございます」

そう言うと彼女は深々と頭を下げた。

「じゃ、エリスさんと呼ばせてもらおうよ」

「あ、はい……。あの……。助けてもらった身で失礼であります。晶さんにいくつか質問したいことがあります」

「さっきのは純粹に殴っただけですか？魔術的な施しもなくドラゴンを倒せるはずはないのですが。貴方は一体何者ですか？」

僕に脅威を感じたのか、身体の背丈程ある杖をこちらに向けてきた。

「何者かと聞かれて答えるだけって面白くないので、秘密です」

「呆れました、まあ良いでしょ。一度は死にそうになって助けてもらった身、なのでこれ以上無様な質問はしません」

そうエリスが言うと構えていた杖を下ろした。

「エリスさん、さっきのドラゴンそんなに強いのか？」

「さっきのドラゴンもそうですが、ドラゴンはクリーチャー最強種族の内の一つです。常識ですよ」

最強種族か、そんなのに挑むってことはエリスさんは強いのか？

「ふむふむ分かったけど、エリスさんって最強種族に立ち向かえる程強いのか？」

「私一人だと確実に無理ですね、だからギルドに依頼して協力してもらったのですが、グリーンドラゴンの強さに腰抜け共は私を置いて逃げて行きました」

なんとというか、こんな可愛い女の子を置いて逃げる奴の神経が知りたいよ、まったく。

「でも、なんで自分からドラゴンに挑もうとしたの？」

エリスさんは苦い顔になり、わなわな震えた。

「あのドラゴンは私の両親を殺したんです。だから敵が討ちたくてギルドに依頼しました。結果的には達成しましたが、晶さんがいなければ両親と同じ様に殺されていたでしょう。本当にありがとうございます。でもアイツは、私が直接手を下したかったです……。グスン」

エリスは復讐を終えた。しかし彼女の手でなく突然現れた第三者の手によって終えてしまったのだ。

そんな僕はエリスさんの震えている肩を抱き寄せた。

「胸は貸してあげるから、泣きたかったら泣けば良い、周りには僕しか居ないし溜め込むのは良くないと思うよ、だからエリスさん我慢しなくても良いんです」

「……うえーん!!……グスン……母さん父さん敵討ったよ……でも！私が敵を討ちたかったよ!!……うえーん!!……グスン……」

それから数分後、エリスさんは僕の胸から顔を離した。

「ありがとう、何だかスッキリしました」

さっき泣いていたせいか目のあたりが赤かった。

「でも、なんだかゴメンね敵相手を勝手に殺しちゃって」

「いえいえ！晶さんが来てなかったら私はきっと死んでいましたし、私が敵を討てなかったのは少し残念ですけど、それは晶さんがやってくれたので良かったです。本当にありがとうございます！」

エリスは満面の笑顔を僕に向けて言った。

「やっぱり笑顔の方が、エリスさんは可愛いね」

こちらもエリスの笑顔に負けない僕お得意の企業スマイル発動。

「~~~~ツ！」

顔が赤くなる。エリスさんはやっぱり可愛いな。

「あ、そうだ、エリスさん、この近くに人が密集している所ない？」

微妙に不嫌気な顔をしてきた。

僕の何がいけなかった。

「ここからだ、キャスバルが一番近いですかね」

「キャスバルって都市名だよね？」

「そうですね、これも常識なのですが……。一体何していたんですか？」

「言えないよな、異世界で神様やってみましたって。どこの電波野郎だ。」

「……えっと……。管理者？」

「私に聞かないで下さい」

「じゃあ禁則事項です」

「分かりました。私は晶さんにまだ信用するに値されていないみたいですね」

言い方が少し辛い、僕のハートがブロウクン！！
少し傷つきました。

「本当にゴメンね」

だが言えない、僕はこんな事で、ここに来て初めての友達を失いたくない。

色々な意味で

「分かりました。人には他人に知られたくない過去もありますし、晶さんが私を本当信用出来るまで言わなくて良いです」

「うん……。分かった……」

余り聞かれると、ボロだしちゃうところだった。

「それよりも……。これからが大変ですね……」

「大変って何が？」

「馬車がなくなってます」

つまり移動手段が歩きということである。

……。たぶん……。

「なんで馬車が無いの？」

「たぶんですが、ドラゴンから逃げた人達が帰る移動手段で、馬車を持っていったんだと思います」

エリスの周りには黒いオーラが立ち込めていた。

お怒りの様です。

ハッキリ言って、今のエリスさんには神様パワーがある僕でも近付けない。それほどにエリスさんが怖いです。

「……つまり、歩きつてことだよね」

「……すみません……、私が不甲斐ないばかりに……」

エリスさんがしょんげりしたためか、出ていた黒オーラは、消失し

ていた。

未知の力だね。うん。

「いや、別にエリスさんのせいじゃないよ、悪いのは依頼人を置いて逃げていった人達だよ。だからエリスさんは全然悪くない」

「ありがとう……」

「で、歩きだとのくらい掛かるの？」

エリスは難しい顔をして懐から地図を取り出した。

「大体徒歩で10日間程ですね……」

「分かったよ、じゃ人助けだと思って道案内お願いします」

「分かりました、こんなことで恩を返せるとは思っていますが、道中の安全は私が護ります」

「うん、じゃお願いするね」

かくして僕はエリスと共にキャスバルに向けて出発した。

「でも、エリスさんより僕の方が強いよね？」

「それを言わないで下さい！」

うなだれるエリスに僕は少し萌えた。

創造主の異世界旅行 2話（後書き）

泣き声まったくもってわかりませんでした……。
反省にしたいと思います

創造主の異世界旅行 3話

僕は仲間にエリスさんを加え、都市キャスバルに向けて前進中。

道中色々なクリーチャーに襲われたりして、返り討ちになっている。

「やっぱり、柔らかい相手には便利だね《自動迎撃》」

さっきから来るクリーチャーは、全て僕の周りに浮いている七個の光球がビーム（魔力弾を打ち出している）を出して、自動迎撃しているせいか、エリスさんが攻撃する前に、クリーチャーは仕留められてしまっている。

そのせいか、さっきからエリスさんの視線が痛い。

「助かっていますけど、……私の護衛……いらないうじゃないですか
」

エリスさんに頼んでいるのは道案内だからね。

「それにさつきから、なにげに凄いことしてるんですか！」

《自動迎撃》ってそんなにここでは、凄いのか？

あ、またビームが森の方に。

「さつきからそれから出てくる魔力弾、私の全魔力を軽く超えてるんですけど！どゆうことや、説明してもらいたいのですが」

さつきからエリスさんの目が怖いです。

とりあえず説明ぐらいはしておこう。

「えっと、まずこの光球から説明するね。これは……」

さつきから出ている光球は、この旅は辛い道のりになるであろうと思ひ僕が精製した物で、探知距離50メートル程。
敵対意思レベルが4以上になると、自動的に獲物に向かって、ビームが向かって行く様に仕掛けをしたもので、威力の程は相手をギリギリ殺せる様に光球が調節してくれている。

と説明した。

「敵対意思レベルってなんですか？」

「それは……」

生物には基本的に、敵対する相手がいる。

例えば言えば、猫が犬に敵対心をもっているのが、良い例だ。

敵対心レベルは。

1〜2レベル

憎いだけで行動に移さない。

3レベル

恨みごと満載で、藁人形などで釘を人形に打ち込むなどと、直接手に出さないことを言う。

これからが、命にまで関わる問題。

4レベル

殺生にあてはまるもの全て、相手が直接殺そうとしない限りまずない。

5レベル

捕食しようとする生物が行動に移る。

「だから、さつきから常にレベル5の対象ばっかで面白くない、4とかが一番の希望なのに」

一度でも良いから盗賊やら山賊やらに会ってみたい。

「分りましたけど、そんなのどうして分かるんですか？」

「光球は50メートルの射程圏内に入ると、自動的に相手の頭の脳波を調べるんだ、電気信号で生き物は生きてるから脳内調べれば簡単に、相手の考えていることなんて分かっちゃんだ」

エリスさんはさっきから分からないといった感じで、こちらを見ている。

「ゴメン分からないよね？」

まあ、こんなファンタジー世界に、脳波やら電気信号なんていう概念はまだ確立してないだろうし、仕方ないだろうな。

また、森の方に向けてビームが……。

「なんと言いますか……、色々聞きたいことがいっぱい出来ました」

何故満面の笑みなんですかエリスさん。

「腹は決まりました……。晶師匠、私を弟子にしてください!!」

なんですと!!……!!

馬鹿な……、どこで僕はエリスさんに弟子フラグを立てたんだ!!

「なんでか、聞いても良いかな？」

「さっきの師匠の《自動迎撃》の説明を聞いて確信しました……。師匠についていけば、私は魔術師として更なる高みに行けることができる!!だからお願いします」

エリスさんは深々と頭を下げてきた。
それは弟子が師匠に敬意を伝える為に。

うわ〜。

めんどくさい。

やっぱりさっき《自動迎撃》の説明のせいか。

でも、弟子を取ってみたいかも。（ここ本心）

「分かったけど、師匠って呼び方はは止めて欲しいな。僕としては、いつもみたいに晶さんって呼んでもらいたいな」

「しかし!」

そこまでして僕を師匠と呼びたいか。この馬鹿弟子が!！（某東方腐敗）

「だって僕達友達じゃないか！」

僕の初めての人間の友達。

僕の初めての仲間。

僕の心を満たしてくれた、初めての存在。

前は欲しくても手に届かなかったものがここにある。

僕は何よりもエリスさんが大事なんだ。

宝石だって要らない、お金だってエリスさんの方が1万倍も大事だ。
なんだっいたらこの命差し出しても構わない。

それ程までに僕は……！！

世界よりエリスさんが大事なんだ！！

「泣いているんですか師匠？」

僕は目から涙を流していた。

「なんで泣いてるんですか？」

心配してくれたのが、エリスさん僕にハンカチを渡してくれた。

「ありがとう……」

僕は頬を伝って行く涙を拭き取り、笑顔で言った。

「だから、師匠じゃなくて晶さんだって……」

呆れ顔になりつつも、エリスさんは直ぐに表情を変え、僕の好きな笑顔になって。

「分かりました、晶さん！」

笑顔を僕に向けて言った。

「これからもよろしくエリスさん」

「こちらの方こそ魔術のご教授お願いします！」

僕達二人は笑い合い、今会ったことに感謝した。

そんな中光球からレベル4の反応がいくつもあった。

(これはまさか、山賊とか盗賊の気配！捕獲しなければ！)

「《自動迎撃・フリーズ》」

僕がそう言つと光球は輝きを失い地面に落ち霧散した。

「え？どうしたんですか?!」

これまで鉄壁を誇っていた光球が、突然消えてしまったせいかエリスさんが慌てている。

「近くに殺意に満ち溢れた人間が、集団でこちらに向かってきているよ」

「それならさっさと迎撃すれば良いじゃないですか？ここで迎え討つよりも晶さんの自動迎撃に任せた方が安全じゃないですか？」

そんなことは分かっている。

だけど……。

「ほら僕って《自動迎撃》しか使ってなくて実力(?)みせてなかったでしょ?だからさ、エリスさんには僕の戦い方見てもらいんだよ」

「晶さんなら素手で勝てそうですね」

あればアクセシデントです。

「とりあえず、もう来たみたいだね……」

そこを見れば人の集団がある。

「数は100程、装備は軽装。余裕だね……」

そして前に一本踏み出し空に向かって飛翔した。

飛びながら後にいるエリスさんに。

「じゃ行って来ますよ」

「本当晶さんは常識外れですね……。がんばってください、晶さんの戦い様を私はここで見ています」

そして僕は集団の中に向かって飛翔した。

創造主の異世界旅行 3話（後書き）

書いていて自分が痛くなってきました。

創造主の異世界旅行 4話

エリスさんの所からここまで飛んで、軍団の先頭であろう場所に着地した。

「お前、魔術師か!？」

着地した場所に近い人が僕を睨んで、警戒し始めた。

それに続いて、後にいる人達もそれぞれの武器を手に取り、警戒している。

「いえ、ケファイアです」

僕の言った意味が分からないのか、全員が頭を傾げた。

そんな中、リーダー格の男がニヤニヤしながら僕の前まで来た。

「金と服を置いていけば、命だけは助けてやるぞ。」

ニヤニヤ笑いに少し嫌悪感を感じた。

「残念ながら金は一銭も持ってないし、この服は僕から離れると消えるから、服を剥ぐことも出来ないよ」

僕の着てる服は一種の拘束具だから、なんの準備もな脱ぐと世界が沈んでしまうのだ。

「ああー！！いいから脱げや。いくら魔術師様でもこの数は倒しきれないだろ？」

いや、超簡単です。それと僕は神様です。（自称）

それにしても、この世界の魔術師の強さの基準がわかんないな。後でエリスさんにでも聞いてみよう。

「さつきから、だんまりか？まあ良い、お前を殺した後に後に居る女を頂いていくぜ。今日は久しぶりのお楽しみ会だ、たっぷり可愛がってやるよ！」

リーダー格の男が言うと、周りにいる奴らはゲラゲラ笑い出した。

さつきコイツらなんて言った。

エリスさんを慰め物にしようと言ったのか……。

こいつらには死よりも辛い体験をさせてやるぞ。

「お前らにもう弁解の余地は無い、僕の大事な物を傷付け様とした罪、死よりも辛い苦痛を味遭わせてやるよ」

流石の僕もさっきのは怒った、普通に殺してやるぞと思ったけど、コイツらには産まれたことすら後悔させてやる。

「皆やつちまえ!!」

リーダー格の男がそう言うと、何人かの男が僕に向かって剣を振り下ろしてきた。

僕は避けることもせず、真っ正面から来た剣の振り下ろしの直撃を受けてやった。

僕の身体に直撃した剣は、逆に崩壊し、僕の身体には傷一つついていない。

神様の身体を舐めちゃいけませんよ。

「「「なあツツツ……!!」」」

流石に驚くかな。

でも、慈悲は与えてやらない。

僕の両目は紅く染まり、《世界》が変わる。

「やっぱり、気分の良いもんじゃないな……」

少し口調が変わっているが、これは魔眼の影響で、見ている《世界》が変わるせいだ。

「さようなら」

射程範囲はここに居る奴ら全員。

さあ……、荒れ狂え!!

「《狂気眼・沙夜の唄》」

何をしたかというと、知っている人には分かると思うが、あの名作『沙夜の唄』に出てくる青年が見ている世界を、強制的に見させるのがこの能力である。

そりゃ、狂うよね。

「さて、そろそろ終わるかな……」

見てみると1000人程居たであろう場所に、数多くの死体が積み重なっている。

その中、まだ死んでいない二人の男が争い続けている。

「死ねや！！化け物！！」

そう言って剣を振り回しているのは、さっきのリーダー格の男だ。

「お前を殺せば元に戻るはずだ！！」

リーダー格の男と打ち合いをしているのは、普通の青年。

例えそれを殺しても、元には戻らないのに……。健気だね。

「うおおおおお！……！」

二人の雄叫びが響き渡り、全力を持って死力を尽くしている。

剣のぶつけ合う音のみが今は鳴り響き、死合により一層緊迫感が漂っていた。

その中、僕はその光景を眺めつつも低いレベルの戦いだなと思った。

「スキあり！！」

青年は両手で剣を横にスライドさせながらも、振り切った後、剣を捨て左腰にあるナイフを左に持ち変え、リーダー格の男の腹に突き刺した。

「グフッ！！」

「終わりだ化け物！！」

そしてリーダー格の男は地面に倒れ伏し、周りには血が一面に広が

っていった。

「勝った……。でも、なんで帰れないんだ!!!!!!!!!!」

青年は近くに捨てた剣を拾い、自分の腹に突き立てた。

「…何故だ…。何故死ねない!!」

腹部に刺さるハズの剣が弾かれ、地面に落ちた。

「自殺出来ない様にしたからね……。自分から死のうとは考えない方がよいよ、自殺する程に狂う世界で、君は何を見つめるのかな？」

「人間!? ああ……。さっきまで見ていたのに、随分懐かしい気がする……」

どうも、精神的にも肉体的にも限界が近付いてきている様だ。

「じゃ、がんばって」

僕は青年に背を向け、エリスさんの元に帰ろうとした。

「待つてくれ!!」

青年は、僕を引き止め様と必死に叫んだ。

「ここはどこだ？」

声が震えていた。

「僕よりも君の方が詳しいはずだよ？」

「そんな馬鹿な!!俺はこんな地獄の所知らない!!」

「君は今だ理解していないだけで、ここは君が知っている世界そのものだよ」

僕はそれだけ言うと、再度青年に背を向け、空に飛び出す。

「待つてくれ!!」

しかし青年の呼び止めにまた、足を止めてしまった。

「俺はこれからどうやって生きていけば良い……」

「それを考えるのは僕では無く、君だ。いずれ君は、人間を愛おしむ様になるだろう。後、君から見た僕はなんで人間に見えるか分かる？」

「そうだ！何故、お前だけ人の姿に見えるんだ！」

「それは、僕が此処から外れている存在だからだよ」

僕はそもそも、この世界の理から外れた存在。

ルールに縛られることは無く、ただの異端者。異世界の神はただのバグに過ぎない。

「お前は一体何者なんだ！！」

「僕はただの神様だよ」

僕はそれだけを言うと《転移》を使用し姿を消した。

創造主の異世界旅行 4話(後書き)

盗賊タイプってよくわかりまん。

創造主の異世界旅行 5話

「だだいま」

僕は《転移》を使い、エリスさんの目の前に移動した。

「おかえりなさい！」

驚かそうとして、目の前に《転移》したのに、特に驚いた様子はない。驚いた顔を見たくてやったのに、ちよつとガツカリした。

「で、僕の戦い方分かった？」

エリスさんは、少し困った顔をしてきた。

「なんとも言えない戦い方でしたね」

確かに。魔眼を使用して、あっちが自滅していっただけだからね。

「晶さんは、幻覚の魔術でも使えるんですか？」

「近いけどちょっと違うかな……、使ったの魔眼だから魔術じゃないしね」

「魔眼を所持してたんですか!」

エリスさんは驚いていた。

「見せて貰っても良いですか?」

そんな子犬の様な、つぶらな瞳で僕を見ないで!色々な意味で死ぬそうです。

「別に良いけど、何が見たいの?」

僕の魔眼って、結構種類有るんだよね。《狂気眼》も含めて、後10個程あるし。

「魔眼複数も所持してるんですか!こんなことアカデミーに言ったら、解剖の対象に成り兼ねませんよ!」

アカデミー、怖いです。

「まあ、僕は訳ありなんだよ」

エリスさんは、少し暗い表情になり俯いてしまった。

え？でも間違えて無いでしょ？

「それとエリスさん、ちょっと良いかな？」

エリスさんは、顔を上げ、いつもの笑顔に戻っていた。

「あ、はい、何ですか？」

「僕に、此処の常識を教えて貰いたいんだけど」

流石に、ここまで知識が無いとヤバイでしょ。後々。

「ああ〜！確かに昴さんは常識を知らな過ぎですよね」

ちょっと傷付いたよ。

「では、まず。今居る大陸の名前は《キャスター》と言います。…
…」

それから、エリスさんの説明は長い間続いたので、僕なりにまとめてみた。

この世界の大陸は、4つに別けられている。

魔術が発展し、魔術師が拠点としている。

・魔術の大陸^{キャスター}

今僕達が、居るここがそうみたいで、魔術師はここで、魔術を習うらしい。

魔術には、種類と属性があるらしく、種類は《強化》《聖霊術》《治癒》《攻撃型》《防御型》e c t……。属性に関しては、多過ぎて、しつかりと決まっていなことがあるらしく、現在は七割がたしか名称が決まっていなとか。それと、エリスさんに、属性を聞いたところ《第三神速》という珍しい属性らしく、効果があまり解明されていないらしいです。

科学が発展し、錬金術師が拠点としている。

・科学の大陸^{サイエンス}

魔術の世界だから、てっきり科学力0だと思っていたよ。

《サイエンサー》は科学が発展しているらしく、生活水準が妙に高い。ガスコンロやら洗濯機やら車など、昔僕が居た日本とたいして変わらないみたいです。

錬金術師は、物質変換を行うらしく、レベルによっては、石を金に換える者も存在している。

人から迫害された、異端者の楽園。

・異端者の楽園^{イレギュラー}

人とは形が違っていたり、異端な能力を持っていたり、と様々だが、ポピュラーなのは《エルフ》《獣人》《魔族》《竜人》。

《エルフ》

森と暮らす民で、争い事は好きではないらしい。体力は低いが人は魔力的にまず使えない《ファンタズム・ワールド》を使いこなすらしい。

耳がトンガってます。はい。

《獣人》

知的に阿保で、森と一緒にくらししている。（色んな意味で）身体能力は高く、武器を使って戦うらしい。

《魔族》

次期魔王候補の方々。魔力も身体能力も高く、まず、会ったら逃げろとまで言われている。だが、肝心な時に、慢心しすぎて逃げられたり、殺られたり。色々と可哀相になってくる一族である。

《竜人》

トカゲが二足歩行してくる珍生物。口からブレスを吐き、魔力は無いがその分、硬い鱗と身体能力が命の生物。

大陸の名称は詳細不明。だが、統一されているらしく、国王が現役通称。

不称のライン《アンノウン》

国王自体は存在しており、あらゆる手段をもってしても情報は得られず、不確定な情報のみで、まさに霧に消える様にして、偵察隊が消息を絶つらしい。

だが、確実な言える事は、国王は確かに存在している。ただそれだけである。

あらかた聞いたけど、やっぱり知らないことばかりだったよ。

「と、言うわけです。これにて、エリスさんの講習会を終にします」

エリスさんの顔は満足そうにしていた。

「エリスさん、ありがとうね。これからも、僕は旅を続けていきたいと思うよ」

何たって、僕は完全無欠の不老不死なんだから、時間はいつぱいある。

「頑張ってくださいね」

あれ？

一緒に行ってくれないの？フラグは立てたと思ったのに……。

「晶さんの進む道に障害があれば、私を取り除いてあげます。だから一緒に頑張りましょ？」

かなり感動した。

やっぱり仲間って大事だね。一生の宝物だね。

「この近くに小さい町があるんで、そこで休憩しましょう」

「分かったよ」

町発見！中に入ってみると、結構賑やかでした。

「では、晶さんは疲れたと思うので、すぐに宿を探しましょう」

確かに疲れたけど、まだまだイケル。

「エリスさん違うよ」

僕はエリスさんの手を取り、走り出した。

「え、あ、どうしたんですか突然走り出して？」

「こんな所に来たら、楽しくまくちゃー！」

そう言って僕達は路地に入り込んだ。

「魔眼に関して何も教えて貰ってないや」

「説明に夢中で、晶さんの魔眼のこと聞いてませんでした」

何気に、うっかりな二人だったとき。

創造主の異世界旅行 5話(後書き)

国語勉強しないといけないと思ってきました。

創造主の異世界旅行 6話

今現在、名も知らない町でエリスさんと一緒に露店を回っている。

「オイ！その坊主！今なら100Gで、バダ産のタラの実が20個買えるぜ！さあ、買った！買った！」

威勢の良いオツサンが、僕に売り込みし始めた。

しかし、お金の単位がGって……。どこのゲームですか！

価値観はあまり分からないから、後でエリスさんにでも教えてもらおう。

「晶さん、タラの実買ってみますか？」

興味はある。

だが、今の僕にはお金がない。エリスさんにたかるのも気が引けるし、どうしたもんかと考えていると……。

「お金が無いなら私が出しましょうか？」

とエリスさんが、僕が無一文と分かったのが、奢ってくれるみたいだ。

「いや、それには及ばないよ。ちょっとお金の硬貨を見せてくれな
い？」

そう僕が言うと、エリスさんは懐から財布を取り出し、次々と硬貨を見せていく。

「まず、この銅貨は一枚10G。銀貨は一枚1000G。金貨は一枚10000G。金貨に関しては、今手持ちにありませんから、現物を見せられません」

とりあえず記録っと。

僕は《創造》で財布を創り、中には異次元空間並の広さに、それに見合うだけの数の硬貨が入っている。

僕はあたかも有った様に、コートの裏ポケットから財布を取り出し、100Gをオツサンに渡し、タラの実を買った。

「なんで、常識知らずの方が、硬貨なんて持つてるんですか！」

いやいや、いくら常識外れの方でもお金ぐらいあるでしょ。

「秘密」

エリスさんに教える時が来るまで、秘密にしておきたい。

「分かりました。これ以上は何も言いません」

ちよつとエリスさんが、不機嫌な様子。

買ったんなら食べないと。

さっき買ったタラの実を一個程口に含んでみた。

蜜柑の味がしました。

「エリスさんも食べる？」

何か、食べ物で釣っているような気がして、どこか罪悪感が残る。

「……頂きます……」

食べて少しすると、頭を上下にコクコクさせている。どっちら気に入ってくれたみたいだ。

さらに、周りをエリスさんと探索していると、どこからか叫び声が聞こえてきた。

「エリスさん、トラブルに巻き込まれに行こうよ!」

エリスさんは嫌な顔をした。

「助けに行くのなら分かりますけど、生き生きと、トラブルに巻き込まれに行く人は初めて見ました」

溜め息をしながら、じっと目で僕を見ている。

「じゃ、助けに行こう!」

叫び声のあった方へ僕達は駆け出していく。

目標捕捉。

いかにも狙われそうな美女と、逃がさんとばかりに美女を囲む不良達。

一番近い不良に対し、僕のドロップキックが炸裂した。

「ゲッペー!!」

不良Aの、カエルが潰れたような声を出したせいか、周りの不良達が警戒し始めてきた。

「てめえ、人のお楽しみ邪魔しやがって!」

こちらは1人あちらは7人。

数の差は歴然。

エリスさんは、僕が全力で走っていったら、途中でいなくなっていました。

「ダメ!逃げて!」

美女は自分の身よりも、僕の身を心配してくれてみたいだ。

感動してきた。あの人には幸せになってもらいたいと心底思った。

「糞餓鬼が、正義の味方気取りのつもりか」

演技で、か弱い少年でも演じてみよう。

「うう〜、ゴメンなさい。許してください、さっきのドロップキックは出来心だったんです〜」

「ああ〜!!」

不良の一人が、僕に近づき襟を掴みあげようとした。

「ひょいっと」

不良は襟を掴み損ない、手は空を切った。

あまりの出来事に、周りの不良達は盛大に笑い始めた。

「糞餓鬼が！！」

僕を掴み損なった不良は、顔を真っ赤にさせ烈火の如く怒りだした。そうすると、怒りの矛先は僕に向けられ、顔を全力で不良は僕に殴りつけた。

だが、そんなことは予想内なので《痛感共有》をしてやった。

「ぐはあ！！」

顔を殴られたと同時に、僕を殴った不良は、声を上げたのと同時に退け反り、周りに居た不良達は不思議そうな顔をして見ていた。

《痛感共有》

それは、ダメージを与えた対象に、本来受けるはずの痛みを一緒に受けて貰うといった使い道微妙な技である。

しかし、僕の場合は行った動作に対して《ストック》を乗せることにより、結果として起こりえる現象を相手にのみ与えることができる。

つまり、こっちは痛くなくて、タメージのみがあっちに行くというわけだ。何気に鬼畜技である。

「お兄さん、何痛がつてるの？」

僕は、いかにも何が起こった分かりません。といった感じで演技を試してみた。

「てめえ……、魔術師か!？」

彼がそう言つと、周りに居る不良達も僕を警戒してくる。

「さあ〜、どうでしょう〜」

あえて僕は相手を試す。

さあ、どう出るか楽しみ。

「退散!!」

彼の掛け声とともに不良共は一目散に逃げって行った。

「つまらなかつたね…」

ちよつと先に、さつきまで不良に囲まれていた美少女が、目を丸くして僕を見ている。

まあ、外見的には14才の子供だし、驚いているのだろう。だが、本当の僕の実年齢は数えるだけ無駄だし。

「君、魔術師なの？」

この場凌ぎの為、僕は魔術師と名乗っておいた。真偽を問われてもこの世界の魔術師の真似事ぐらいは簡単に出来る。……知識さえあればだけど。

「まずは、助けられてありがとうね。私の名前はリリア＝カシストよ。貴方の名前は？」

微笑みながら自己紹介をリリアさんはした。

「僕の名前は木村晶と言います」

礼儀だし名乗っておいた。

「なら、晶君ね」

「では、僕はリリアさんと呼びますね」

「お互いの自己紹介も済んだ事だし、助けくれたお礼に今日はお昼を^ご馳走させて」

こうゆう人って、たいがい断れないオーラ漂ってるよね。だって目で訴えてきてるんだよ。断れないって。

「でも、連れが迷子になってるんで、探さないといけないんですよ」
エリスさん今どこに居るんだろ。

そんな事考えていると、息を切らしたエリスさんが僕の隣に居た。

いつの間……。

「ゼー！、ゼー！。晶さん早過ぎですよ！」

「ごめんごめん」

さて、断る理由が無くなってしまった。元からどこかで食べる予定だったし、まあ良いか。

「それと！そこに居る人誰ですか！」

エリスさんの指を指した方向にはリリアさんが居た。

「今日の昼飯を作ってくれる人」

「そんな人、居るわけないじゃないですか！」

でも、間違っていないしな。

「あ〜」

おずおずとした感じで、リリアさんは片手を小さく拳げながら言うてきた。

「はい！何ですか!？」

少しエリスさんは気分が高潮している様だ。

「誤解しているみたいだから言っておきますが、晶君は私を不良の魔の手から救ってくれたのよ。たがら、お礼にとでもお昼を馳走

させてもらおうと思って話したら、なんて言ったと思います？それはですね「連れが迷子になったから探す」と言ったのよ。こんな子供が貴方を探す為に必死になっていたの、だから晶君を許してあげて欲しい。貴方に対する晶君の思いは純粋なものだから、なにより、晶君は貴方が大事だから……」

僕はリアさんの話しを聞いていて、なんか話しのレベル変わってないか？と思った。

「えっ……」

エリスさんは顔を紅くしながら、こちらを見ては伏せ、こちらを見ては伏せを繰り返している。

そんな仕草に、僕はエリスさんと同じように顔を紅くしていた。

「私の事、心配してくれていたんですか？」

「当たり前だよ！エリスさんのこと心配してたんだからね！」

「置いて行ったくせに……」

それを、エリスさんに言われると精神的に辛すぎる。

やっぱりもう少しだけ僕の力を制限する必要性が出てくるのかな。

「すみませんでした……」

しかし、男という物は、女性に対して理由が分からなくとも、怒っているなら謝っておくのが吉だと思っ。

「本当に反省してますか？」

紅い顔をしながら上目使いで来るもんだから、可愛い可愛い。

「はい……」

「晶さんが本当に反省してるなら別に良いです」

「ねえ、お話は済んだ？」

さっきまで空気となっていたリリアさんが、ニヤニヤしなから僕とアリアの双方を見比べている。

「リリアさん、なに笑ってんの!？」

「別に、ちょっと二人とも可愛いなあと思っただけよ」

「それ、僕に喧嘩売ってるの？」

僕のこと村上晶は外見が14才にしか見えない為、男気があまりなく顔も中性的なのでかなり昔だが、よく女の子と間違えられていた。

「そんなことより、お昼の準備しないといけないから早く行きましょう」

そんなこんなで、僕達2人はリリアさんにご馳走させてもらうことになった。

創造主の異世界旅行 6話(後書き)

詰めてみました^^

創造主の異世界旅行 7話

「自己紹介まだ私達まだしてなかったわね、名前はリリアカシストというわ、よろしくね」

「私は晶さんの連れのエリスクウデイスと申します」

未だ自己紹介が終わっていないかった2人は、リリアさんの手作り料理を食べながら談笑を楽しんでいた。

「で、リリアさんは何を営んでいるんですか？」

「うーん、あえて言うなら移動型売買アイテムショップ屋？」

どうやらリリアさんは、屋台を移動させながら色々な所に転売したり、自分で作った物を趣味半分ですべて売っていたりするそうだ。

「何をメインに売ってるんですか？」

「うーん、大体はマジックアイテムなんだけど、ごく稀に武器や防具などが手に入るから、そっちの方も扱っていたりするわよ」

「色々扱っかけてるんですね」

マジックアイテムなんてあるんだ。

「リリアさん、少しマジックアイテム見せてもらっても良い？」

僕がそう言うと、リリアさんは不思議そうな顔をして。

「?別にそこらへんにある物を転売してるだけだし、私の作るマジックアイテムに関してもあくまで趣味でやってるものだから絶対数が少ないわよ、それでも良いなら見せるわよ?」

「あ、よろしくね」

僕がそう言つと、リリアさんは立ち上がり、部屋の奥へと歩いて行った。

「晶さん、こんな所で見なくても普通に店で見ていけばいいじゃないんですか?」

「ん?別に好奇心今見たいだけだし理由なんて無いよ」

まあ、ただたんにマジックアイテムって何かなあゝ、て思ってただけだし、それよりも早く現物を見ておきたいと心が叫んでいる。

リリアさんが奥に引つ込んでから少し時間が経つと、リリアさんがカートを押して来た。

カートの上には瓶や装飾品、様々なものが乗っかっている。リリアさんはカートにある物全てをテーブルに並べた。

「持って来たわよ」

「色々あるんだね」

「ほんと色々ありますね」

「で、アイテムの説明した方が良い？」

「お願いします」

リリアさんは怪訝な顔をしながら、近くにある瓶を手を取った。

「これなにか分かる？」

リリアさんは手を取った瓶を片手に、僕に聞いてきた。

「いや、全く」

リリアさんとアリアさんは驚いた顔をして顔を見合わせた。

え？ヤバイ？そんなに僕は常識知らずですか？

これ以上、アホだと思われるのは流石に僕も嫌なので、あまり好きじゃないけど、この世界の《理》を覗いてみる。

「それは、『ポーション』だね」

「え？分からないんじゃないの？」

「晶さんいつの間にそんな知識身につけたんですか！？」

エリスさん、それは僕が真正銘アホだと思ってたんだね……。

「エリスさんの知らない間に身につけたんだよ」

とりあえず適当に言い訳をしておいた。

「そうですね、流石に『ポーション』を知らない程、晶さんは無知じゃないですね」

大陸よりもマジックアイテム方が知名度高いつて、ここ大丈夫なのか？

「ごめんね、晶君を試すようなことしちゃって」

「別に良いよ。それでも説明は最後までやってもらいたいな。リリアさんは商人さんなんですから解説も仕事の一つですよ。それに、色々情報持ってそうだから僕に色々教えてもらいたいな」

リリアさんは、反省した面持ちから微笑を浮かべた。

「アイテムの解説をしましょう。まずは……」

リリアさんは、紅色の液体が入っているポーションを片手に説明し始めた。

「まず、この赤ポーションは、体力増強の秘薬で人によって効果はまちまちなの、購入はどこのショップでも買えるわ。1番冒険者が使う秘薬なのよ。大体の値段は一本50Gよ。次は……」

赤ポーションをテーブルに置き、青色の液体が入っているポーションの説明が行われた。

「次はこの青ポーション、精神力増強の秘薬で、魔術師なんかが一番使ってる秘薬なのよ、これも赤ポーションと同じで、どこのショップでも売ってるものよ。大体値段は一本100Gよ」

てことは、エリスさんも使ったことだよね。

「エリスさんは、持ってるの?」

「持ってますよ」

やっぱり持ってた。

「他にも、黄ポーションや、黒ポーション、白ポーションなんかがあるわ」

黄ポーション?黒ポーション?白ポーション?そんな物もあるんだ。

「どんな物なの?」

「黄ポーションは、赤ポーションと青ポーションの複合型で、体力増強と精神力増強してくれるの、一本辺り1000Gで売っているせいか、あまり冒険者が買うことがないのよ」

確かに赤ポーションの20倍、青ポーションの10倍じゃ買う人いないよね。

「なんでそんなに高いの?」

「制作費用が、赤ポーションや青ポーションより高いかららしいわ。なんでも制作方法が特殊らしくて、あまりおっぴらに出来ないみたいね」

「なるほど〜」

「で、黒ポーションと白ポーションは増強薬じゃなく、攻撃型の薬品らしわ」

「無いの？」

「だってあつても売れないし」

「何故に？」

「白ポーションと黒ポーションの攻撃力が乏しいからよ。ベテランの魔術師の魔術と比べてあまりにも低いわ」

「なら、なんでそんな物が売ってるの？」

「白ポーションと黒ポーションは、赤ポーションと青ポーションより昔からあるらしくて、昔は魔力が無くなった魔術師の補助アイテムとして便利らしかったみたい」

「あ、私持ってますよ」

エリスさんは懐から白い液体が入っている瓶と、黒い液体が入っているを取り出した。

「ほらね」

へへ。こんななんだ。

「待って！それ『ダークミスト』と『ホワイトミスト』じゃないの？」

リリアさんは一人叫びながら驚いた顔をして、エリスさんの瓶を指差している。

「なんですか？『ダークミスト』と『ホワイトミスト』って？」

「エリスさん知らないで買ったんですか！？」

「いえ、家にあつた物を掻っ払っただけですが？」

「どんな家よ！？」

さつきから驚いているリリアさんには悪いけど、説明してもらいたいな。

「『ダークミスト』と『ホワイトミスト』ってなんなの？」

僕の言葉で落ち着きを取り戻したのか、説明にリリアさんは入った。

「『ダークミスト』と『ホワイトミスト』は昔の禁術と言われた程の代物よ、まさか生きている間に伝説のマジックアイテムに出会えるなんて……」

「そんなに凄かったんですか？」

いつの間にか『ダークミスト』と『ホワイトミスト』と言われていた代物が、テーブルから消えていた。

「確か……、伝承が正しければ神殺しの専用の物らしいわ」

それ、僕に喧嘩を売りたかったのかな。製作者。

「ただの減らない白ポーションと黒ポーションかと思ってましたよ」

「容器から減らない辺りから不思議に思いなさいよ。それと、あまり人にはそれ見せない方が良いでしょう」

「聞いておきますけど、なんでですか？」

「ねえ、伝説のマジックアイテムって幾らで売れると思うっ？」

「そんな現実離れた勘定は私は知らないです」

「アリアさん、人のこと馬鹿馬鹿言ってるくせに自分も知らないこと多かったんだね。」

「最低でも1000000000Gらしいわ」

「凄！！売ればいきなしお金持ちだね。」

「なんと……。家に転がってたからただの白ポーションと黒ポーションかと思ってました」

あまりの事実にはエリスさん笑顔が引きつっている。

「それに神殺しの『ダークミスト』と『ホワイト』の両方があるってことはかなり凄いことなのよ。セットであったことなんて歴史上一度しかなかったし」

「それっていつ頃の話し？」

神殺しの薬品があるなんて凄……。興味が沸いてきた。

「確か……。5000年ぐらいの話らしいわ。事実かどうか分からないけど」

「神殺しの薬品があるってことは、倒したかった神様がいたってことなの？」

「居たんだと思うわ……。伝承に乗っている神様の名前はみんな同じだったみたいだし。確か……。名前は『トオヤ』って書かれていたわ」

あれ？聞いたことある名前な気がしてきた。まあ良いか……。

「脱線しちゃったわね。なんで他の人にそれを見せちゃいけないかというと、相手はそれをエリスさんを殺してまで欲しがるからよ。さっきの最低金額もそうだけど、エリスさんの持っている神殺しは、宗教関係者が聞いたら確実に殺してでも手に入れるでしょね」

「家に転がってた物がそんなにヤバイ物だったなんて……。母さん、父さん、なにやって手に入れたんでしょか」

エリスさんは一人感傷に浸りながら僕の裾を握ってきた。

「そうゆうことだから、他の人には秘密にしておいた方が良いわよ、しばしの沈黙。」

「大丈夫、例えどんか奴らが来ようとも、エリスさんには傷一つ付けさせはしないよ……」

僕は誓ったんだ、大事な物の為なら命すら賭けると。

「晶さん……」

上目使いでエリスさんは僕を見ていた、僕はエリスさんに不安を与えないため、めいいつぱいな笑顔を向けた。

「エリスさんが生きている限り、僕が君の障害を取り除いてあげる。だから心配しないで欲しい」

「なんだか告白みたいですね」

そう言うとエリスさんはさらに顔を赤くしてきた。

その光景にリリアは思った。

(なに、この甘い空間……)

この空間を打破すべくリリアは考えていた。

(どっしり……)

時間が経つ度に空間がさらに甘くなっていく。

(な、なにか、武器は無いのか！)

瞬間リリアに電撃が走る。

(これだー!!)

アイツら、気づいていないみたいだから気づかせてやれば良いのだ。

「二人は恋人なのかしら」

そう私が言うと二人は勢いよく離れた。

「違いますよ。なれれば最高ですけど」

エリスさんは最後に小声で言った。

あえて最後のは聞き流しておこう。

「僕はアリアさんを守れば良いから。でもなれれば最高だね」

晶君も最後に小声となにか呟いていた。だが、晶君の小声は本当に聞こえなかった。

「で、今日は遅いし、これまでというわけで、宿は決まってるの？」

「今から決めます」

「なら私の所で泊まっていかない？不良達のお礼ということ」

「なら、お願いします」

エリスさんはベコリとお礼をした。

そして今日はこれで幕を閉じた。

創造主の異世界旅行 7話（後書き）

口調がああああ!!

創造主の異世界旅行 8話

目を覚ますとそこは……。

「知らない天井だ……」

一度は言ってみたいと思っていた言葉を、言える日が来ようとは、人生中々分らないものである。

コンコン

僕が寝ている寝室のドアの方からノック音が聞こえてきた。どうせリリアさんが起こしに来てくれたのだろうと思う。

「晶君、起きてる!？」

やっぱりリリアさんだった。

「起きてるよ〜!」

とりあえず返事だけでもしておかないとね。

「朝食が出来たから身支度整えて居間の方に来て!」

そうリリアさんは言うと言間の方へ向かって行った。

「起きるだけ起きておこつ」

衣服は代えが無いため昨日と同じ服装で居間へ行くことになった。

「そう言えば、あまり自分の服装に関してはあまり興味なかったね」
僕は自分の服をよく見てみる。

ローブに長ズボン、中には『あっち』に居たときの服をイメージしているため地味だったりしている。

「相変わらず僕って地味だよな」

苦笑しつつ居間の方へ足を向け、歩いて行った。

「おはよう！晶君！」

「おはようございます、晶さん」

「おはよう、リリアさん、エリスさん」

朝食はテーブルに綺麗に並べてある。

「早く席着いてね！」

少し談笑をしながら僕達は朝食を食べ終わった。

「色々ありがとうございます」

今から僕達二人は都市キャスバルに向かうため、リリアさんとお別れをしてい
た。

「中々充実した一日だったわよ。こちらこそありがとうございます」

リリアさんはどこか名残惜しそうな顔をしていた。

「こちらこそ、ありがとうございます」

「二人共元気でやっていってね！」

リリアさんは僕達が見えなくなるまで見届けてくれていた。

「エリスさん、何かここで準備することあるなら僕に言ってね」

「特に無いですね……。道中私は戦うこともしなかったので結構ア
イテム余ってるんですよ」

「あれ？そうだったけ？」

「その口が言いますか？晶さんが使っていた《自動迎撃》のおかげ
で被害はありませんでしたが、そのせいで私の出番が全くありませ
んでした。あ、これ独り言なんで気にしないでください」

エリスさん、それは嫌味にしか聞こえないよ……。

「流石に《キャスバル》まで歩き、という事はしたくないので馬車

を借りに行きましょう」

「待った」

しかし、そう言うエリスさんに僕はストップをかけた。

「どうしたんですか？」

「いや、歩き嫌だったの？」

「歩くよりも速いですしなによりも時間短縮及び疲労軽減になります。好きで歩きなんて選ぶ人は、かなりの物好きか、お金がない人などですよ？」

確かにお金がなければ移動手段は歩行に限られるか、ヒッチハイクになるわけだ。

「なら僕が何か召喚して、それに乗れば良いと思うんだけど……。どう？」

色々出来るわけだから、使わないとね。

「『召喚儀式』ですか……。確かに上手くいけば移動手段を手に入れますけど、代わりに膨大な魔力を消費しますよ？ミスったら魔力が減るだけで何も起きませんし、儀式にはかなり手間が掛かりますよ？」

召喚魔法ってこの世界だとそんなにめんどくさいだね。

「大丈夫！そんなミスはしないから。とりあえず食料買い込んで外

に出よう」

とりあえず食料確保の為僕達二人は動いた。

「おっちゃん、全部くれ！」

今僕達は食料確保の為、おじさんとお話中。

「ちょ！お金大丈夫なんですか！？」

エリスさんは、僕の懐の事を心配しているようだ。

「大丈夫大丈夫」

「お客さん冷やかしなら帰ってくれねえか、他のお客様の迷惑になる」

別に迷惑掛ける気はないんだけどね……。

「おっさん、僕は嘘をあんまりつかないから大丈夫だよ」

「あんまりって……。そこからして俺はアンタを信用できねえなあ、お客さん、さっさと帰ってくれないか？」

「お金ならここにあり」

僕はそう言つと、硬貨がいっぱい入っている袋をオッサンの目の前で開けた。

「確かに……。どうぞ、好きなだけ持って行ってくれ……」

疑問を口に、エリスさんは聞いてくる。

「僕の実力の一つでも思ってくれれば……」

あからさまにやったのは駄目だったなあ。と考えると、次からは自重しようとして心に決めた。

「分かりました。晶さんに、あまり探りを入れるのはやめます」

言い訳が苦しかったから、聞かれなくて良かったよ。

「その心は？」

ネタに走ってみただけで、さすがに元ネタを分かるやつは居ないか。

「聞いてもどうせ、晶さんはぐらかしますから……」

まあ……。そうですね。

「秘密主義者だからね」

秘密は、あるだけかつこが良さが増すから好きだよ。

「友達いなくなりますよ？」

「~~~~~!~!」

的確過ぎて、僕は声もあげられなかった。

それと……。あまり昔のトラウマを思い出させないで欲しいな……。

そのせいか今僕はorzの状態になっている。

「すみません！言い過ぎましたか？」

「大丈夫……。たかが傷心で心痛めてるだけだから……」

何が大丈夫なのか、自分でも分からなくなってきた言い訳を僕は言った。

「ほんと、すみません……」

どンドンと、エリスさんの表情が暗くなっていく。

すみません！ごめんなさい！僕が全て悪いんです！

僕は、エリスさんの暗くなっていく表情を見て、心の中で謝罪した。

「エリスさん、そんな顔しないで欲しい……。エリスさんは笑っていた方がステキだよ」

原因作ったの自分だから、どうにかしなければ！

「でも…、私は晶さんの心を傷付けてしまいました……」

エリスさんは更にダーク状態になり、周りにオーラを放っている。

「大丈夫だよ、エリスさんが気にするような事じゃないよ」

しかし、それでもエリスさんのオーラはまがまがしいさを保ってい

る。

「晶さんに、気にしてもらおう事じゃないですよ……」

更にダーク化。僕にどうしろと！

「いや、ホント気にしてないから」

「ありがとうございます……」

ようやくエリスさんから、まがまかしいオーラが収まった。

「見ててね、僕の取っておきの『召喚儀式』を！」

意識を集中させる。

我が力は源。

我が存在は世界。

幾たびの存在を超え。

幾たびの世界を超え。

我が声聞こえ、我が僕になる者よ……。

我が導きに応えよ。

紡ぎあげる。紡ぎあげる。僕に相応しい僕を紡ぎあげる。

(仕方ない……。能力は格段に落ちるかもしれないが「人」になるう)そうゼロが言うと、収縮されていく魔法陣はさらに速度を増し、小さくなっていく。気付いた頃には目の前にあった。

閃光！魔法陣からは濃密の魔力と共に人らしき形をした物が目の前に現れる。

「我が名はゼロ。主の命により今ここに召喚され参上した。」

僕の目の前には8才程の少女が片膝着いていた。

もう、どうにでもなれ！！

心の底からそう思った。

創造主の異世界旅行 8話（後書き）

どうにでもなれ〜

創造主の異世界旅行 9話

幼女（使い魔）は片膝を着いて、僕の目の前に召喚された。

「君がゼロ？」

ゼロの周りには濃密な魔力が漂っている。

未だ片膝を着いたまま面を上げず、ゼロは沈黙を保っている。

数秒後、ゼロは口を開いた。

「我が名は『ゼロ』、主の命により参上しました」

「召喚に応じてもらってありがとうね」

「いえ、主が喚ぶなら、我はただ従うだけです。感謝の言われは必要としません」

言動や姿勢を見たところ、性格面が凄く硬そうだ。

「良いんだよ、言いたいんだから言わせておいて欲しい……。それと、さつきから頭を下げてるけど、そこまでして僕の顔を直視したくないという訳じゃ無いでしょ、だったら面を上げて欲しいな……」

ゼロは渋々と顔を上げ、僕の顔を凝視してる。

「まずは質問、良い？」

僕は念の為、ゼロに確認を取った。

「我が答えられるものでしたら何なりと」

「じゃあ一つ目。なんでゼロは人の姿してるの？」

乗り物として使用する為に喚んだのに、人型とか……。喧嘩売ってるのか……。でも美少女だし、こっちの方が良かったかも。

「あ…はい……。主は解ると思いますが、私の『本体』の存在自体が、この世界の『キャパシティ』を大きく上回っている為、このような仮染めの姿で現界しました」

あ、そうそう『キャパシティ』ってのはね、『世界』の存在できる許容量のことを指すんだ。

つまり、ゼロの存在自体が、この世界の許容量を大きく上回っているってことなんだ。そして、許容量を超えると、世界自体が無くなってしまう。

そもそも普通は、個体で世界の許容量を超えることなんて、普通は有り得ないのだが、ゼロは単体でやっちゃったみたいだ。

え？僕は神様だけど裏技使ってるから大丈夫なんだよ。

「なるほど、でも、なんで人の姿？」

別に、人の姿じゃなくても良いのでは？

「それは、色々あって人の姿をとっていたら定着しまして……。別に他の姿にも変えられるのですが、人の姿で暮らしていた分、こっ

ちの方が馴染みがありました……。本来の姿は、世界を選ばないといけませんでしたから大変なんです」

「分かったよ、理由が有うが無かるうが、ゼロは僕の使い魔なんだから気にしなくて良いよ」

僕はどこか優しげに言った。

「……主に感謝を……。それとさっきから隣で倒れてる方は何物ですか？」

ゼロの視線を追うと、そこには、倒れているエリスさんの姿があった。

「エリスさん！」

どうやら、僕が召喚する時に、過度の魔力量に当たってしまい、気絶してしまったみたいだ。

「うわ！白目剥いてる息してない、いかにも死にそうなパターンだよー！ど、どうしようー！」

僕が慌てていると、隣にいるゼロに少し驚かれた。

「まさか、主、召喚をしている最中にもこの者は居たのですか……？」

「はい、居ました……」

しばしの沈黙。この沈黙は、僕にとって痛いものだった。

「主、落ち込んでいるよりも、この者を助ける方が先決だと思います」

このゼロの一言により、少し冷静を僕は取り戻した。

知識はある、力はある、だけど完全に制御出来るか僕にも分からない。だけどやってみるしかない。

時間は刻々と過ぎていく、忙なければいけないのに、足が震える。

エリスさんが死んでしまう……。

制御を間違えたりしたら。

間違えてエリスさんを殺してしまったら……。

そんなものが頭を駆け巡り、より一層僕に不安を与える。

僕が初めて会った人……エリスさん。

初めて会えた時のことは、今でも鮮明に思い出すことができる。

自分の注意不足でエリスさんが死んでしまうなんて……。僕には我慢できない！

だから僕は……。

動かない足に力を入れ、エリスさんの身体に触れた

まだ温かい……。

助けられる可能性があるのに助けられないなんて馬鹿馬鹿しい。

……今助けます……。

エリスさんの周り光が集い、光は命を分け与える。

「さすがは我が主、無詠唱であれほどとは、……流石は神」

「あれ？なんで私寝てるんですか？」

どうやら成功したようで、エリスさんが目を覚ました。

「良かった……。本当に良かったよー!!」

そして、僕は感動のあまり、エリスさんに抱き着いてしまった。

「え！え?!」

状況が読めないのか、エリスさんは混乱している。

「良かったよー!!」

「えーっと、何がどうなってこうなったのか、晶さん、教えてもらいませんか？」

「それは、我が主の代わりに答えます」

「主って何!?その子誰ですか!?!」

ゼロの突如の登場に、エリスさんは驚いていた。

「それも含め、我が説明します」

それからゼロは、エリスさんに全てではないにしろ説明をし、どうにかして納得してもらった。

「つまり、ゼロちゃんは晶さんの使い魔で、私はその儀式の過度の魔力量に当てられて、倒れたということですか？」

もちろん、エリスさんには一度死にそうになりましたとか、ゼロの存在についてなど、危なそうなところは省いて説明した。
「じゃなきゃ、後で色々問い詰められたり、色々酷いめにあいそうだ。」

「その通りです。後、我にちゃん付けは止めて下さいエリス殿」

「え、可愛いじゃないですか」

ゼロの批判的な言葉に対し、エリスさんは一步も譲らない。

「だって、こんな可愛いくて小さいんだし勿体ないですよ！」

力説するエリスさんに対してゼロの表情は変わらない。

確かに、ゼロの見た目は8才程の少女で、胸も身長も無い。

髪の色は銀髪で眼は真つ赤。気が強そうで身長は無い。ギャップ萌えとかそんな感じだと思う、そんなだから可愛いと見られても仕方ない。

「しかし、ちゃん付けは多少なりとも抵抗を感じます。だからやめていただきたい」

多少どころじゃなく凄く嫌がっているのが分かる。

「ゼロ。馴れるのも大事だと思うよ」

「分かりました主……。エリス殿、ちゃん付けでも何でも来て下さい」

渋々といった感じでゼロは了解した。

「じゃあ、お言葉に甘えますね。そうですね……。私の事をエリスお姉ちゃんと呼んで下さい!」

ゼロが少し身体を震わせている。

「いえ……。それは少し……」

ゼロはかなり抵抗を感じているようで、言葉を上手く紡げないようだ。

「ほら、晶さんが言ってたじゃないですか、「馴れは大事だ」と、

今から精進しましょう!」

ゼロは僕の方を見てきた。

僕のせい?

視線がそんな感じで訴えてくる。

そんなのは、本人達で決めてね?

と、ゼロにアイコンタクトで送った。

(了解しました……)

対してゼロは、僕に念波を送ってきた。

……アイコンタクトいらないじゃん……。と心の中で思った。

「姉では無い者を、そう呼ぶのは抵抗を感じます故、そうは呼べませんエリス殿」

「そうですね……。でも、いつかはゼロちゃんをお姉ちゃんと呼ばせてみせます!」

ゼロはフツと笑い。

「頑張ってみてください。よもやその願い、この身に届くかもしれません」

これが、クーデレか……。未だデレの要素は無いけど、ゼロがいつかデレると信じてる。

「はい！分かりました！」

なんか、立場逆になってない？

「ゼロちゃんの髪フサフサだね〜」

いつの間にか、エリスさんがゼロの頭を撫でている。

「そうかですか？」

嫌がる様子はなく、ゼロはエリスさんに頭を撫でられている。

「はい！フサフサフサフサ最高です！」

そんな調子で、エリスさんとゼロは親睦を深めていった。

しかし、使い魔を召喚したのは、確か足が無いからだだった気がする。けして親睦を深める為だとか、お姉ちゃんと呼ばせる為とか、そんな事の為に喚んだのではないのだが……。

僕は、再度ゼロとエリスさん方を見て、これでも良いかなと思った。

本当の姉妹のようで、見ていて羨ましいと思ってしまうのはこのだけの話。

創造主の異世界旅行 10話

それはそうと……。

「あれ？『召喚儀式』してゼロちゃんを喚んだってことは『キャスバル』まで私達馬車ですか？」

馬車を使いたくなかったから使い魔を喚んだのだから、ゼロは人型だし無理だろ。

「僕としては、幻竜とか古代種を喚ぼうかとしたんだけどね」

まあ、でも、古代種の程度ではゼロってトツプランクだよな？

「それは、我が幻竜や古代種に劣ると言いたい訳ですか主」

ゼロは不機嫌顔でそう言った。

「別にそんなつもりじゃなかったんだけど……。僕達は『キャスバル』にまで行く足が欲しくて『召喚儀式』したんだ。乗り物（？）が欲しかったんだよ僕達は……」

「なるほど……。主に喚ばれて応えたからには、失望させる訳にはいきません」

ゼロは考えるそぶりをしながらエリスさんに頭を撫でられている。

……馴れてきてるね……。

「ゼロちゃん、何か方法ありますか？」

「すみませんエリス殿、行った事もない所だと現在の私では『送る』ことが出来ません」

「????？」

さっきの話から推測するに、ゼロは『転移』出来るんだなあ。と思った。

「すみません……」

ゼロの顔がしよげり、どこか力無く言った。

「別に良いですよ！私、妹と一緒に旅に出るのが夢だったんです！」

それに対し、ゼロを励ますように、エリスさんが力強く言った。

「エリス殿……」

ゼロは落ち込んでいたのだが、エリスさんの励まし(?)により瞳に活力が戻ってきた。

「それじゃ、ちよつくら馬車を借りてきます！」

そう言うと、エリスさんは疾風の如く走り去って行った。

そして、なによりも聞きたい事をゼロに聞くことにした。

「ゼロ……」

「なんですか主」

ゼロは、僕の聞きたい事を分かっているのか目が真剣だ。

「ゼロはいつたいなんなの？能力は『転移』できるのはなんとなく分かるけど、その他は全然分からない」

存在するだけでこの世界に影響を与える存在って、何がある？

「我は……。元主のパートナー……。それだけです」

言いたくないのか、言葉を濁しながら滑舌が悪い。

「それはそうと、我は、元主に伝言を頼まりました」

「それは僕に？」

違つたろうと思いつつも聞いた。

「違います。我もその者の容姿については聞かされていませんが、元主いわく見れば分かる馬鹿だそうです」

何その特徴……。

「それ、捜すの無理なんじゃ……」

「時間は掛かりますが、たっぷりと時間はあります。コッコッと捜せばいずれ見つかると思います」

ゼロの存在自体が規格外つてことは、その捜している奴つて……。

「もしかして、その馬鹿つて『此处』に存在しない？」

「それはちょっと分かりません。我は、その者が生きているのと、その者が異世界移動することしか分かりません」

結論。

人外が捜しているのは人外でした。

「ほぼ無理だね」

「でも、いずれ会えると思いますから」

長い時間を掛ければ会えるかもしれないけど、それは何時のことになるのやら。100年？1000年？そんな近い間に会えれば良いね。

僕は、ゼロにも色々あるのかと思い、これ以上聞かないことにした。

「持って来ましたよ！」

元気な声が出た方を向くと、そこには馬車らしき物と一緒に手を振っているエリスさんが居た。

「では、出発しましょう！」

そして僕らは『キャスバル』まで馬車で行くことになった。

創造主の異世界旅行 10話(後書き)

短くなりました……。。

創造主の異世界旅行 11話(前書き)

a c f a 最高!!

創造主の異世界旅行 11話

特にトラブルも無く、僕達は無事に『キャスバル』に着くことができた。

しかし……。

「広いね……」

外からではわからなかったけど、中に入って気が付いた。

「そうですね？都市としては当たり前前の事だと思いますよ？」

エリスさんは未だゼロの頭を撫でている。

馬車の中でもずっと撫でてたよね……。

「主、都市としては些か狭いと思うのですが？」

ゼロはもう慣れたのか、エリスさんの撫でをスルーしている。

そして、僕を陥れるかのようなエリスさんへの援護射撃。

「ごめん。……非常識で……」

僕は鬱になりつつも、ぎこちなく笑顔で返した。

「主……」

「晶さん……」

心配してくれたのかな？

「「笑顔が恐いです」」

二人の息が合った。

そして僕は、唐突にロープが欲しくなった。

『創造』して造ろうかな。オリハルコン製のやつ。

「晶さん、そんなに落ち込まないでください」

僕を慰める為か、エリスさんの顔が近い。

「私の言いたいことは、そんなに無理して笑っても私達嬉しくありません、と言いたかつんです」

エリスさんの顔が近い、愛おしい者が僕を気遣っている。それだけで僕の中の闇(?)は消えた。

「晶さんが非常識でも構いません、私はそんな貴方を全て受け入れます!」

眼が真剣だった。エリスさん、それって告白ですか？
でも、僕はあまり良いとこないし勘違いだね。

僕は自己解決した。

そして、エリスさんの言葉を思い出し、僕は心の中で号泣した。

「主」

ゼロが何か言いたそうにしている。

「エリス殿の言う通りです。そんな辛そうな笑顔、やめてください」

エリスさんに続き、ゼロが僕に注意した。

「ありがとう、二人共」

そう僕は二人にお礼を言った。

「いいえ！私は指摘しただけですし、別にお礼言われる事では……」

エリスさんはあたふたしながら言った。

「それでも、ありがとう」

僕は微笑みながら、本当に色々な感謝の気持ちを込めた。

「~~~~~っ！」

エリスさんは顔を赤くして、そっぽを向いてしまった。

「主、これからどうするのですか？」

ゼロは今後の方針について聞いてきた。

「そうだね、取り合えず今後の方針については、歩き食いでもしながら話し合おう」

後でエリスさんに、色々と魔術（僕流の魔法）を教えないといけな
いから大変だ。

一様、師匠だしね。

色々と考えていたら、何時の間にか僕は笑っていたみたいだった。

「?どうかしましたか主?」

ゼロは僕が笑っていたのを、不思議に思ったみたいだ。

「ちょっとね」

「そうですか……」

渋々といった感じにゼロは引き下がった。

「それより、行こうか!」

僕は未だ顔を赤くしているエリスさんの手を引っ張り、食べ物屋へ
直行した。

「美味しいね」

今僕は、タコ焼きらしき物を片手に街を歩いている。

「そうですね、初めて食べましたが中々ですね。……中のタコ除けば……」

「主、タコは異世界の邪神って言われているのはご存知ですか？」

右から僕、ゼロ、エリスさんが横一列に並んで歩いている。

ホント、広くて助かった……。狭かったら、見事に通行妨害だしね。

「エリスさん、あまり好き嫌いしないでください、それとゼロ、ニトロ好きにそれは鬼門だよ」

分かる人には分かるようにしてみました。

「主、ニトロって何ですか？」

ゼロが真顔で聞いてきた。

「聞いてどうするの？」

教えても良いけど、念の為ゼロに確認しておくことにした。

「いえ、そんな邪教を見つけたら潰しておこうと……。タコを信仰

するの何か間違ってると思いますし、眼を覚まさせないのですし」
ゼロは、二ト口を宗教かなにかと間違ってるいるみたいだ。
「やっぱり教えるのは止めよう……。」

それとも誤解を解くべきか。

「晶さん、今度あれ食べましょう！」

しばらく悩んでいると、エリスさんはいつの間にかタコ焼きを平らげて次の屋台に移動していた。

別にどんどん食べても構わない。お金は『創造』出来るから良いし。

「おじさん！これとこれ、それとこれもお願いします！」

ガラスケースの中のケーキを指差して、エリスさんは元氣良く注文した。

「どれだけ食べるんだろうね、エリスさんは……。」

そんなふうに呆れていると、エリスさんが僕達を呼びに来た。

「どうやら、店内で食べるみたいで呼びに来たようだ。」

僕達は手頃のテーブルを見つけ座った。

「歩き食いたせいで少し疲れまし、落ち着いた店で食べる方が良いですね」

選択の余地すらなかった。

「じゃあ、ゼロちゃんには特別にこの大きいイチゴが乗っている方を、進呈してあげますね」

エリスさんがイチゴケーキを箱から取り出すと、ゼロの皿にイチゴケーキが乗った。

「エリス殿に感謝、では頂くとしよう」

「晶さんもどうぞ」

僕の皿にエリスさんがゼロと同じ要領でイチゴケーキを乗せた。

「では私も……」

一口、イチゴケーキのスポンジを口に含んだ。

「……上手い!」「」

三人同時に叫んでしまった。

そして、周りの視線が少し痛い……。

これだけ美味しいなら、意外に全部食べられるかもしれない。

このスポンジのフワリ感、そして生クリームの絶妙な甘さ、美味しい。の一言に尽きる。

箱の中に入っているイチゴケーキ食べ切れるかも、と少し希望が見えてきた。

しかし、現実にはケーキの生クリーム程甘くなかった。

「ゲップ……。もう入らない……」

イチゴケーキとの激戦の末、僕は胃が焼けていた。

そんな僕とは対照的に、ゼロとエリスさんは楽しく喋りながら、苦悶の表情せずイチゴケーキを食べ続けていた。

「ケーキという物は実に美味ですね、エリス殿」

最初に、箱の中身を見て驚いていたゼロはどこに行った。

「ね？女の子の半分は糖分で出来ていて言うし、意外にいけると思っただけじゃありませんか」

しかし、こうやって楽しくやっていけるのは、幸福だな、と実感していた。

「あ、空になりました。店員さん勘定お願いします！」

箱の中身を空になったと確認すると、僕が清算した。

「主まさか……。インゴットしたのですか……？」

「お金は無いし、仕方ないんだよ」

「程々にしてください」

「善処するよ」

そうゼロに答えると、店内から僕達は出て行きましたブラブラと歩き始めた。

創造主の異世界旅行 12話(前書き)

感想あればお願いします^^

創造主の異世界旅行 12話

きっかけはこれだった。

「これ！見てください！」

そうエリスさんが持って来たのは、何か書かれたチラシみたいなものだった。

見せられても読めないんだけど。

「それがどうしたの？」

「この年、《キャスバル》で大きな闘議場が開かれるみたいです！」

「じゃあ、見に行く？」

エリスさんは見に行きたいのだろうと勝手に推測した。

「見に行くのではなく、私達が参加するんですよ！」

突然のことに少し僕は驚いた。

「理由は？」

「ほら見てください。『チーム戦による総合戦。基本何でもあり、自分の力を使って勝ち進んでいこう。優勝者にはトロフィーと賞金1000000Gを進呈します。君達の勇姿を見せてみせよ。追伸。」

今回は遙々王都から陛下が参ります、もしかするとスカウトされるので力入れていきましょう。統領より』出て優勝すれば王都からスカウトが来て将来安泰ですし、お金も入ってウハウハですよ！」

そう言うエリスさんからは背後から燃え上がる炎らしき物が見える。やる気は凄いいあるみたいだし、ここで僕が水を差すのもどうかと思

った。

「主、一度ぐらいは自らの力で働いてみて、お金を稼いでみればどうですか？」

ゼロの提案には、少しどころじゃなく心当たりがあった。僕は『創造』があるせいかあまり働いたことない。

つまり、働けと。

「分かったよ、ゼロ出れば良いんでしょ？」

「主、がんばってください。それと我も出ますので、エリス殿、主、我で三人で参加することになります。」

そう言えば最初にチーム戦って言ったもんな。

「頑張りましょう！晶さんにゼロちゃん！私達が出れば確実に優勝間違いなしです！」

まあ……。ここまで来たら優勝しないといけないな。

エリスは、僕達と出れて嬉しいみたいだし頑張らないと。

……………加減はするけど……………。

「では登録しに行きましょう!」

「すみません、参加者なのですが登録お願いします」

エリスさんが、受付嬢らしき人に話し掛けた。

「はい、今回の参加者の方ですね、参加者の人数とチーム名を教えてください。更に登録費用により一人につき1000G頂きます。」

ガラス越しに、眼鏡を掛けいかにも真面目に事務仕事をしそうな人がいた。

「参加者は三人です。チーム名はどうしましょう?」

エリスさんが僕に対し聞いてきた。

「好きに決めて良いよ」

どうせ今回限りの事だし、そこまでこだわりも無いからエリスさんにチーム名を委ることにした。

「ゼロちゃんは何かありますか？」

「我も特にないのでエリス殿が決めるといいです」

ゼロも特に何も無いのかエリスさんに決めさせる。

「〜、じゃあ私好みを決めさせてもらいますね。後で文句とかなしですよ？」

エリスさんは、受付嬢の方からペンと参加書を貰いスラスラと記入していく。

「お願いします」

受付嬢は差し出した参加書を受け取ると、何か機械らしき物にそれを入れると中からプレートらしき物が出てくる。

「これが今回の参加プレートです。出場する際は必ずこれを付けてください、でないとなんとなってしまうので気よ付けてください。それでは手数料に3000Gお願いします」

そう言うとエリスさんは『僕』の財布からお金を出した。

……もう既に僕の財布はエリスさんの物らしい……。

「確かに頂きました。では御武運を『エアゼロ』後、宿は各自で見つけてください」

プレートらしき物を貰い、胸に張り付けた。

後、宿を見つけ就寝した。

それと、エアゼロの名前の由来についてはあまり興味なかったので、エリスさんからは聞いてはいなかった。

そして翌日……。

今僕達は、大会をする会場で待機していた。

周りを見渡すと、どれも強豪らしそうな人達がたくさん居た。中には女性の方もおりこの大会のレベルが高いと伺える。

会場は緊迫の中、一部のお気楽な者達を除いて、試合が始まるその瞬間を待っている。

その前に予選がある訳なのだが……。みんな、こんな調子で大丈夫なのか心配になってきた。

その中、やはりなのか大人達の大会の中で僕達みたいな子供（？）は異様な様で目立っていた。

そして、一部のお気楽者はからかって来たり、僕達の事を心配して帰そうとしたり、迷子と間違えられたり色々あった。

そして、その中でも一番めんどくさい状況に今なっていた。

「お嬢ちゃん達可愛いね、良かったら僕専用のメイドにならないかい？」

今、いかにもキザっぽい人がエリスさんとゼロに声を掛けている。

勿論僕は蚊帳の外である。

いかにも嫌そうな顔をエリスさんはしていた。

「ここで合ったのも何かの運命、君達みたいなの女性は僕みたいなの物に仕えるのが世界の運命だと思うんだ。それに僕に仕えればそれなりの給付金は貰えるし、最高だと思うよ？今みたいなの戦いもしくなくて済むし、君達のような宝石は僕にこそ相応しい、否僕としか釣り合わない、だから君達みたいなの……」

そこまで聞いて、見事までのキザっぷりだと僕は感じた。

相手はイケメンだ。こんな奴に言い寄られたら女の人は顔がポツ……。ぐらいにはなってしまうだろう。

しかし、エリスさんとゼロは顔色一つ変えなかった。

「貴方の言いたい事は分かりました……」

「だったら僕専用のメイドになってくれるのかい?!」

「嫌です」

エリスさんは、きっぱりといい顔をして言った。

「誰が好きで給仕になる訳ないじゃないですか。それに、私は今が一番充実しているのでその誘いはお断りします。ねえ、ゼロちゃん」

「エリス殿の言う通りです。貴殿の誘い断らせてもらいます。それに……」

ゼロとエリスさんはこちらを見て。

「主（晶さん）もいますので」

周りからの視線が痛い、今僕の中では嬉しくて心中で号泣中。

「エリスさん……、ゼロさん……」

目頭が熱くなってきた。

この二人に本当に出会えて良かったと心から思った。

「おい貴様」

感動している最中に、キザ野郎が僕に掴みかかって来た。

そして耳元でキザ野郎は小声で僕に囁いた。

「君があの子達を縛っているみたいだ。君ではあの子達とは釣り合わない、そして僕はあの子達と釣り合える程の財産と名誉を持っている。そこでだ、君とは取引がしたい。……君みたいな子供には多額な金額だろう？」

キザ野郎が僕の手を握り、金貨十枚程握らせた。

「なあに、これは少しばかりの前金だよ、正式に彼女達ををくれるならこの百倍は出そう」

「却下」

この間実に一瞬。

「うむ、ならば二百倍は出そう」

このキザ野郎は何か勘違いしているようだ。

「そういうことじゃなくて。エリスさんとゼロは僕の『家族』なんだ。『家族』はお金で買える程安くない、だからエリスさんとゼロは諦めて」

そう僕がキザ野郎に言うと、キザ野郎は僕に思い切り舌打ちしてきた。

「僕の家系は代々欲しい物は力で手に入れてきた。権力も財産も女もだ。その習わしに従い、僕は君に決闘を申し込む。だが、今は大会の予選すら始まっていない状況だ、今ここで決闘して体力を減らすのは馬鹿のやることだ。そこでだ、この決闘は大会の順位の高い方が勝ち、もしくは僕達が当たり、勝った者が勝者でどうだ。そもそも、君達が予選をくぐり抜けるとは思えないから、僕達の勝利は目に見えてるけどね」

そう言うと、キザ野郎はさっさとこの場を立ち去った。

勝手に決闘を申し込んで、まだ了承すらしていないのに、勝手に決闘するはめになるとはなんて自分勝手の奴なんだ。

「晶さん大丈夫ですか？」

エリスさんは、僕を心配してくれているようだ。

「大丈夫。エリスさんとゼロは僕が絶対守るから」

「晶さん……」

「主……」

ピンポンパンポン

「ああ、今から予選会を始めます。係員に従い各自行ってください
い」

どつちやら始まるようだ。

「エリスさん、ゼロこの大会絶対優勝しよう！」

「はい！」

「了解だ主」

そして幕は降ろされた。

創造主の異世界旅行 13話(前書き)

がんばろう!!

創造主の異世界旅行 13話

「番号、五十〜百までのチームの方、こちらに来て下さい」

優男で、眼鏡を掛けている人が居た。

僕達の番号は五十三。

「皆さん集まりましたね。今から説明を行います。予選の内容は…、と、その前にリーダーの方前をお願いします」

僕は前に出た。

「予選の内容は、リーダー限定のバトルロワイヤルです。先にリーダーさんの方々に前に出てもらったのはイカサマ防止のためです。

《デイスperl》」

そう言うと、光が身体を覆った。

特に僕に変化はなかった。

そして、光が消えると突然一部の人が騒ぎ出した。

「ぬお〜！！強化系魔術全部消された！！」

どうやら打ち消し系の魔術だったようで、掛けられている強化系魔術を全て打ち消したみたいだ。

「まあ、中には既に強化系の魔術でフル強化している者がいた訳でしたが、皆さん差別せず仲良くしましょう」

貴方ははこの先生ですか……。

「では、これで平等になった訳ですので、ルールの説明をします」

1、リーダーのみしか戦闘は出来ない。

2、他の人はリーダーの戦闘には参加出来ない。

3、外野からの補佐が無ければ、アイテム使おうが、魔術を使おうが、我々は基本黙秘する。しかし、アイテムに関しては予選を始める前に使用してはいけない。

4、降参するか、もしくはある一定のダメージを受け、瀕死状態になった場合は強制転移をさせる。

5、指定したエリア内から出た場合、失格となる。

6、生き残りが10人以下になった瞬間予選は終了となり、大会に出場することが出来る。

ん？精神を壊したりしたら、どうなるんだろう？

「監督者さん？質問があります」

目上の方（？）なので敬語を使用。

「ん？もちろん今から辞退しても良いよ？なに、君みたいな若い子が恐がるのは当たり前だよ。生半可な覚悟じゃ、やられるだけだし、やらない方が懸命だと僕は思うよ」

中にはクスクス笑い出す者も居た。

「いえ、精神を壊して勝った場合、相手は外傷もありませんし降参も出来ません。その場合はどう判断するんですか？」

しばしの沈黙。

「『精神操作』か……。そんな禁忌魔術使う者が在るか……。しかし過去の伝承に使う者が在たな……。」

ブツブツと独り言を言い、自分の世界に逝ってしまった。

「まず、そんな者がいないだろうし大丈夫だろう」

優男は爽やかに言った。

「僕使えますよ『精神操作』」

僕も優男のように爽やかに言った。

「……………」

奴ほど、自分の『力』なんかで働いている事が多い。ギルドのランクで高い餓鬼は『イレギュラー』だ」

パチン！！

指を鳴らし、僕がそう言うと、憐れな犠牲者になった人の精神を解放された。

「あれ？どうしちゃったんだ俺。さっき突然意識を失って……。あれ？思い出せない……。」

突然意識が戻り、男は混乱状態になった。

「なっ！！」

優男は男の混乱状態に驚いた。

優男は驚いた。さっきのはなんだ……。

『精神操作』うんぬんはまた別として、意識を刈り取る魔術があるとすればそれは危険過ぎる。さっきこの子の言った言葉の意味が理解できた。

成る程……。これがあの子が言っていた『イレギュラー』か……。

無意識にふと笑いが込み上げてきた。

（力無き子供がギルド稼業で生きる為の術か……。後でギルド行って最小年順に調べてみるか。もしかしてこの子供みたいな『イレギュラー』が居るかも知れない。フッフツ……。久々にやる気が起きてきた！）

久々の新しい発見で、元科学者の人物は冷めていた心に火が付いた。

「ま、ここまで実演しても使いませんけどね。流石に、この外道技は相手を選びますから」

この一言に、一同は胸を撫で下ろす。

「で、予選始めませんか？」

「ああ……。そうだね。じゃ、リーダー全員はその魔法陣に乗ってください」

移動しようとした矢先……。

「頑張ってください晶さん！でも加減はしてあげてください！」

エリスさん、人の視線集めてるの分かってるのかな……。まったく無防備なんだから……。

「主、頑張ってください」

続いてゼロが言った。

「行ってきます」

それだけ言つと誘導している優男さんの後をついて行った。

優男さんについて行った先には大きな魔法陣があった。

「では、皆さん乗ってください」

乗った瞬間魔法陣は輝き、そして……。

「ここはどこ？」

見覚えのない森林が生い茂る所に僕は居た。

創造主の異世界旅行 14話(前書き)

久々の投稿、がんばります^^

創造主の異世界旅行 14話

そして、大会予選会が始まった。

転移されてた先は木々が茂っており、見渡す限りの木々や草などのせいで視界が悪い。

陽射しは強く、熱帯雨林を連想させるほど湿度は高く、蒸し風呂状態である。

しかし、僕は『外部干涉遮断』を使い、快適に過ごしている。これで鬱陶しい木々や草花がなければもつと良かった。

一步を踏み出す。

クチャ……。

どうやら、雨が降った後のようで、地面が少しぬかるんでいるようだ。

踏み出した足は地面に付く度に音を鳴らし、僕の移動の邪魔をする。

「はぁ……。仕方ない。飛ぶかな……」

現在浮遊中。

空から見ても、もはやジャングル構成。見渡す限りの樹海である。

しかし、うつすらだがここ全域に結界が張られているのが見える。やる気ならあっさり壊せるのだが、見た感じ、ここ全域を封鎖しているだけの様で攻撃性のある結界では無いようだ。

「なるほど……。さしづめ予選会場といったところかな……。なら全力で……。いややっぱやめておこう」

本気なんて出したら余裕でこの世界吹っ飛ばし、全力出す必要性を感じない。

そもそも、なんとなく言ってみただけで、最初から全力でやる気なんてさらさらなかったりするのだ。

「《自動迎撃》セットオン、概念エンチャント。 《先に射出す物

》

自動迎撃により作り出した光球は三つ。

更に概念により光球には『先に射出す物』の効果が乗り、どんな攻撃も打ち消し、先に相手を射る能力が追加された。

しかしこれにも少し弱点があり、大型クリーチャー相手の場合倒し

きれない可能性が生まれ、攻撃されてしまいダメージを受けてしまう可能性が出来るしまう。

ま、僕は当たっても大してダメージにならないんだけどね。

なら要らないと思うが、そこは雰囲気出しという事で。

とりあえず、適当に飛んでいれば勝手に自動迎撃が相手を見つけ打ち落とすので、空の散歩といきますか。

<Side大会管理者>

十年に一度行われる大会なのだが、今までに私を驚かすような実力者は現れていない。

錬金術により発達した科学の結晶『テレビ』の画面から、私の使い魔の見ている光景を映像として処理。テレビとリンクさせて私は観ている。

しかし、いつもながら『サイエンサー』の錬金技術には驚かされる。

今となって私の一番の楽しみは、進み行く『サイエンサー』の錬金

『了解。私こと電子の妖精リリースちゃんにお任せ。……検索結果に木村昌という人物は存在しません、残念でした』

「そうか……。となるとお前のデータベースに入っていない『イレギュラー』出身かもしれないな」

元よりリリースの情報は期待はしていなかった。

何故なら『イレギュラー』以外の人物データは既にデータベースに登録済みであり、これほどの魔力保有量ならばすぐに見つかるはずだからだ。

『パソコン』は管理者のみ与えられるサイエンサー技術の結晶である。

『パソコン』と電子妖精との契約さえ結んであれば『イレギュラー』以外のデータは全て共有されている。

「管理地区B拠点管理局は木村昌の監視。リリース手伝いに行つてこい」

『了解！』

『プログラムシフトはどこまで使っいいい？』

「全部使っても構わんが間違つてもハッキングを受けるなよ」

『無問題〜』

そう言うとパソコンの画面から消えた。

私とリリースはリリースが電子妖精になる前からの古い付き合いで、私

とリリスの関係を一言で表すと『幼なじみ』と言った方がしっくりくるだろう。勝手に出て行くことが多い奴だった。

電子妖精になれば少しは大人しくなると思ったのだが……。

まあ、これはこれで良いと私は思っている。

居ないはずの存在にこうやってまた会えたのだから私は幸せの方がもしれない。

だから、安心しろ。

私はお前を拒まない。

お前の居場所は此処だ……………。

創造主の異世界旅行 15話(前書き)

短いw

創造主の異世界旅行 15話

昌は現在このエリア中心に向かって空の散歩をしている。

「ではここら辺が中心かな？」

移動しなくとも遠くから倒せるが、それは地味だし面白みも欠ける。

「久々に出番だ魔改造ロッドA！」

特に飾り気もの無いどこの武器屋にも売っていきそうな初心者用武器Aを亜空間から取り出し、くるくると回しながら周りに術式を刻みこんでいく。

しかし、途中で誰かが邪魔しようとして攻撃を仕掛けようとしたのか、僕の周り浮いてある光球の三つの内一つが相手の攻撃が飛ぶ前に先に相手を仕留めた。
仕留めたといってもただ相手を失神させただけで、別に命を奪ったわけじゃない。

流石にこの周辺が血泥身になるとやばいと思ったので少し自重した結果。

「こんなものかな……？よし！」

トーン！

足元に展開してある魔法陣を杖の先端部分で少し叩いた。
瞬間、僕を中心に何かか拡がるような感覚に襲われる。

触れた者は目にも見えない得体の知れない物に恐怖し、そういうもんなんだと理解し気絶する。遺伝子レベルから仕込まれた『恐怖』に成す術もなく次々に倒れていく。

「終わったかな？」

周りを探っても、もうとっくに反応が無いので運ばれたのだと推測した。

『管理地区B予選終了。生存者はそのまま待機しておいてください』
アナウンス的なものが聞こえた。

しばらくすると僕の身体に転移魔術が掛かる。これは入るとき同様の仕組みなのか、このエリア全てというか土地に転移の術式が組み込まれている。しかし、何時もの癖のせいかな干渉自体を間違って打ち消してしまい転移魔術は不発に終わってしまった。

結果、僕は転移されず、ぼつんと取り残されてしまった。

ハッ！となつてすぐ気付いたので、土地から術式を読み取り転移先を特定した。

僕は指定の場所に向け転移を開始、しようと思つたが自動迎撃用の光球を消し忘れていたのですぐさま消し、魔改造武器を亜空間に収納しておいた。

しかし、魔改造杖の能力を使うまでもなく終わってしまった。

魔改造を施されている杖の能力は。

『高速詠唱』、『状態異常無効』、『疲労無効』、『身体能力上限突破』、『魔力超回復』、『スキル能力制限解除』

などなどがある。

はっきり言ってチート級の武器である。

これは、村上昌が武器屋に安く売っていたやつを創造の力で超強化した品物であり、なんとなく魔法使いみたいに杖を持ってみたいという理由から出来たものである。

とりあえず、移動しよう。

さっき読み取った術式から場所を特定したので、そこへ向かうことにした。

僕はその場から消え、人は樹海からいなくなった。
聞こえるのは鳥の鳴き声。

生命の息吹は途絶えず、命が此処には溢れかえっている。

さっきまで居た場所にはぽつんと一輪の花が咲いており、周りとは違う異様なオーラを放っている。

人はこれを後こう呼ぶ。

『神聖花』と……。

創造主の異世界旅行 15話(後書き)

次は長くして見せます

創造主の異世界旅行 16話(前書き)

ゲフン ゲフン

創造主の異世界旅行 16話

予選も終わったことだし戻ろうと転移した先には……

「お帰りなさい！」

エリスさんと……。

「主、お疲れ様です」

ゼロがいた。

「ん〜、とりあえずただいま。あんまり手応えなかったね、最初から範囲攻撃使うのはやっぱ反則だったかな……。僕以外全滅ってちよっとやり過ぎた感あるし、もう少し加減しておくべきだったよ」

周りからの視線からは殺気と畏怖が入り混じり、僕を注目している。

エリスさんは少しビクビクしているが、ゼロの方は眉一つ動かさず余裕の表情だ。

確かに、普通はこんなにも殺意の入り交じる中注目されないもんね。エリスさんは普通の人間だし、精神的に弱い所あるから仕方ないと思う。

ゼロに関しては人間ですらないし、こんなのは気にもかけてないだろう。

まあ、それはそれで頼れるところあって僕としては嬉しいし、例えば

僕が居なくてもゼロならどんな相手にも負けないだろうと思う。

だってゼロは制限掛かっているけど、魔力の内包量が化け物クラスだし、『人間』とは格が次元違いだしね。

「おめでとう……。まさか全員を墮とすとは恐れ入ったよ、君の言う通り、外見だけで相手を計らない方が良いという事よく分かったよ。それじゃ予選Bはこれにて終了。敗者は宿で傷を癒しなさい。勝者については来てください」

優男の後を僕、エリスさん、ゼロがついていく。

後を振り向くと、敗者からは嫉みやらしい視線を感じた。

と、いうか、僕ら以外は全員敗者だから、僕ら以外の全員分か……。なにやら、嬉しいような悲しいようなという心境になる。

しかし、この世は弱肉強食、負けた君らがいけないのだよ。

すみません、僕の存在自体が理不尽だったね。
調子乗ってスイマセン。

「流石は昌さん！勝つとは思っていましたが、まさか一瞬とは凄いです！これなら優勝も間違いないですね！」

「主が負けるとはちっとも考えていませんでしたよ。主が負ける方がよっぽど問題ありますからね」

「ありがとうね。これもエリスさんとゼロが在ってくれたおかげだよ。ほんとありがとう」

「では、この先が大会本試合の会場になります。御武運を」

そして、僕達は会場へ進む。

<Sideリリース>

私は電子妖精リリース。

私は精霊と電子要素の入り込んだハーフ、ハイブリットなのだよ。

今現在情報収集の為色々な方々から話を聞いている。

いや、ほんとには観戦だけして帰ろうと思ったのに。

残念な事に、私がついていた頃には試合終わっちゃった。なので悲しいことに戦闘データの収集が出来ませんでした。とても残念。

大将はとても厳しい方なので、このまま帰るのはちょっと勇気が要ります。

少しでも成果をあげないと私が大変だよ。

でも、全く情報が無い訳ではないので良かった。

ちよつと木村昌と戦った(？)人達の話聞いてみる事にしたよ。

そしたら結構面白い話が聞けたよ。

なんでも、木村昌を視認すらしてないと言う方が多かったね。

後、一部の方いわく、空を飛んでいるのを目撃したとのこと。

その後を追うも、木々により動きに制限が掛かってしまっているの
で距離はどんどん離れ、最終的には見失ったそうだよ。

でも、追えなくてよかったと本人達は言ってたよ。

それは何故かって？

それは、あの攻撃を受けた奴なら分かるとのこと。

なので、聞いてみたよ。

でも、言いたくない人の方が多く、仕方ないので脅迫して吐かせよ。

方法はね〜ゲフン ゲフン

それはそうとこんな内容だったよ〜。

いわく、失神する程の恐怖を感じ気絶してしまった。

いわく、何故か自分の本能がアイツを恐れていた。

いわく、たぶんあの発生源であるイカレ野郎と直接戦わなくて済んだ。

あれを感じ取った後、あれはもう別次元のレベルだと解ってしまっただ。

以上より、なんとも情けない敗者達の言い訳でした〜。

それはそうと、私はもうちょっと調べる為、管理地区Bの代表さんと会うことにした。

「ハロ〜」

「誰かこの子供連れ出せ」

私のする挨拶したのに対し、返ってきたのはなんとも礼儀のなっ

ないものだよ〜。

レディーはもつと大切にしようよ〜。

「ごめんねお嬢ちゃん、ここは関係者以外立入禁止だから。」

そうやって追い出そうとする下っ端A。

「ブーブ〜！酷い酷いんだな〜！私これでも凄いんだぞカッコイ
イだぞ副指令なんだぞ〜。差別だ差別だ〜！」

少し騒ぐと、代表さんが小さく「まさかな………」と呟いていた。

「まさかりリス副指令ですか……？」

やっと状況を理解したのか、代表さんが冷や汗を掻いていた。

「そうだよ〜」

私は満面の笑みで返した。

「すみません、まさかりリスさんが実体化出来るとは思いもしませ
んでした。それとその姿はわざとですか？」

あれ〜、何か間違ってるかな〜？

「ん？そう？」

少し自分の姿を見た。

私の姿は見事までの金髪ツインテールの『幼女』のはず、どこも可笑しい部分が見当たらない。

「えへへ、可愛いでしょ？これなら大将にも喜んで貰えるかな」と思つてこの姿にしたんだけど……駄目かな……？」

大将に喜んでもらうために頑張つたのに……。

そんなに可笑的いかな……。この格好。

やっている事が無駄なのかな……？思つてしていると少し悲しくなってきたやつたよ。

うう。

「！すみません！別に可笑的いではなく、とても可愛いらしい姿に魅とれてました！きつとあの御方もお喜びになるかと」

「ほんと！やった〜！」

喜びのあまりぴよんぴよんと跳び上がる。

((((うわ、癒される))))

ここにいる男共全員は、リリスの拳動に癒されていた。

「それはそうと、ちょっと私をあの木村昌と同じ場所に転移して欲しいからお願い〜」

「了解しました」

そういつと私は魔法陣の所まで近付いた。

そして私は白い光に包まれ、転移した。

創造主の異世界旅行 17話

扉を開けたその先には、壁に寄り掛かりこの世界では珍しい黒髪黒眼の青年がいた。腰に刀を挿しており、目つきは鷹よりも鋭い。

そして入ってきた瞬間殺氣的な物を当てられたが、青少年は僕達の姿を一瞥すると、殺気を抑え興味なさげに視線を戻した。

「餓鬼か……」

ポツリと青少年は呟いた。

聞こえていたが的をえていたのであまり強く言い返せなかった。

勿論外見的な意味でだけ。

僕は創造神。

ゼロはその使い魔。

エリスさんは………一般人だった。

ある意味最強のパーティだと僕は思う。

「昌さん言わせておいて良いんですか!？」

「何を？」

「だってあの態度、どう見ても私達を馬鹿にしてみましたよ!良いん

ですか！？言わせておいて！」

「エリスさん少し声のトーンを下げようね……。別に僕は気にしてないから大丈夫だよ。それと怒ってくれて嬉しかったよ、ありがとう」

僕が笑顔で答えると、エリスさんはすぐに視線を外し俯いた。

「主は天然ですか？フラグとか無意識の内に形成して無意識の内にフラグをクラッシュしそうですね」

フラグとかエリスさんに立てたといえは立てたかもしれないけど、僕が天然とは心外だ。

「ゼロ、どこからそんな知識引つ張ってきたの？ちよつとそこに座って軽く更正させるから」

「主、まさか怒ってますか？」

「実は怒ってます。僕の事を天然と言うな！天然とは無意識の内に色々とフラグを立てる無計画の奴の事をいうんだよ」

「なんかすいません……。でもフラグを無計画とか言う人初めて見ました。では主はフラグを計画的に立ててるんですか？」

「クククッ……。フラグを計画的とかそんなの僕には関係ないよ。理由は簡単だよ……。僕はエリスさん一筋だからね！！」

「／／／ああ、幻聴でも冒さんの言葉は嬉しかったです」

とボソツとエリスさんが言ったが僕の耳には届かなかった。

「凄いですね。ある意味堂々と告白してますよそれ。それにそんな大声で……羞恥プレイですか？」

「羞恥プレイとか関係ない！僕は！僕は！！」

ヒートアップしていると黒髪の青少年が投げナイフを投擲してきた。軌道上当たる事はないが、飛んでくると弾きたくなる質なので叩き落とした。

「餓鬼共うるさい。少しは大人しく出来ないのか？それにませ過ぎだ。愛の告白なら此処じゃなく他所でやってくれ、本当に目障りだ、俺を巻き込むな、それが黙ってる」

厳しい目つきでこちらを睨んできた。

余程カンに障ったのかキレかけている。

「だからって殺傷力ある物を投擲するって僕達を殺す気だったの？」

あつちが当たらない様に投げてきた事は分かるけど、それでも当たったんだから謝って欲しい。

まあ、僕から当たりに行つただけだね。

それでもだ、人を殺せる武器を当たらない様にといても投げてしまったのだから少しは反省して貰いたいものだ。

「フツ……悪かったか？」

黒髪の青少年は鼻で笑った。

「ねえゼロ、アイツバラバラにして良い？むしろ魂ごと転生出来ないように消滅させたいんだけど」

「主それは物騒すぎます。それに、ここで人殺したらエリスさんが殺人犯の仲間ということで捕まりますよ」

「そうなんだよね……。エリスさんには迷惑掛けたくないし、この世界を破壊するのも嫌だから……。仕方ない、諦めよう」

「エリスちゃんも昌さんも、なに物騒な話ししてるんですか！やめましょう、こんな話しは」

「でも、こんな話しになったきっかけはエリスさんだよ」

「うぐ！だから、その話しもうやめにしましょう。すいませんその黒髪の人」

「別に構わない」

「うわー、凄く偉ぞ。」

最初は僕達と黒髪の青少年だけだったけど、時間が経つにつれ、ここに来る人が増えてきている。

周りを見渡しても僕と黒髪青少年のような黒い髪をしている人は居なかった。

さらに一人で来ているのはやはり黒髪の青少年だけだった。最低でも三人以上いるのは当然。中には八人という異例なところもある。

人数の制限が書かれてないからっていつても、1〜8人っていう人数の差は戦術的にも戦力的にも圧倒的だろ。

やはりといって単体は黒髪の青少年だけだった。

これだけ居れば、一人でくる人も居ると思ったけどやっぱり居なかったみたいだ。

当たり前だ。人数制限書かれていないなら一人で来る必要は無い。

ならなんで黒髪の青少年は誰ともパーティを組まなかったか。

それは、誰かと馴れ合うのは嫌いなのだろ。

さっきの行動から察するに、独り身主義なのだろう。

「まさか、本当に君らが勝ち上がってくるとは恐れ入ったよ。まあ、どうせ相手が弱かったんだろ、運が良かったね」

実はその八人パーティのリーダーがあのもっとも最初に会ったキザ野郎だったのだ。

なんともイメージ通りの奴だ。

「実力だよ実力。金にものをいわせる奴なんかには言われたくないね」
キザ野郎の服装が最初に会った頃と違い、ヒラヒラだった服がオールドオリハルコンの超豪華武装に変わっていた。

オリハルコンとは貴重なレアメタルで入手が困難といわれている。オリハルコンには金属では珍しい魔力抵抗と、世界一硬い素材として知られている。

入手には、元魔王が居た魔王城の地下にあるといわれている結晶体を剥ぎ取り加工するとオリハルコンになる。

一説では、オリハルコンは膨大な魔力を浴び続けた突然変異の精霊とも言われている。

まあ、つまり、入手するには魔王城に住み着いたクリーチャーを相手に突き進まないといけないということだ。

ギルドではオリハルコン発掘がSランクであるらしい。

それはそれとして……。

「見てくれたまえ！これぞ最強の装備、前後左右と弱点が無く、並の術者じゃ傷すら付けられない魔力抵抗。更にはこの神々しい輝き、

まるで僕と君らの出会いを祝福しているようだ。
だが、君らの輝きと比べてはこのオリハルコンも見劣りしてしまう！なんと美しい……。君らの輝きは世界一だ、君らのような存在をこんな危険な所に置く訳にはいかない！さあこの手をとってくれたまえ少女達よ！」

異常に長い口説文句に途中でどつこうとしたけど、最後まで見ることにした。

結果。

あっちがやたらとエリスさんとゼロを触ろうとするので、蹴り倒した。

「グボツ!!」

蹴りは見事に腹に直撃しキザ野郎は沈んだ。

「カツとなつとやった、けど後悔してない」

どこの犯罪者風味に言ってみた。

一度は言ってみたかったんだよ！

「リクルド！貴様!!」

へえ、コイツの名前リクルドっていうんだね。

知ったからって名前で呼ばないけどね。

そして、キザ野郎のパーティの内の一人だろう、キザ野郎が沈んだのと同時に僕に怒りを向けてきた。

見事までに6人の声が重なり合った。

まあ、確かに先に殴ったのこっちだけど（キザ野郎を）だってねえよ。

そっちがこっちの仲間を勧誘してくる時点でもう妨害でしょ？

あれを見ていたら、なんか胸が裂ける思いがしたのでついっぴやっちゃったんだよな。

「もう！昌さんとりあえず此処から離れましょう！」

エリスさんが僕の手をとった。

なんか久々に、エリスさんの温もりを感じたような気がする。

「おいテメエ！まだ話しはついてねえぞ！！」

さっき僕に殴り掛かってきた奴が叫んだ。

なんとも空気が読めん奴だ。

無意識の内に力を眼に宿し睨みつけた。

「ヒッ！！」

睨みつけた男は情けない声を上げ、ガクガクと震える始めた。

このままでは力に押し潰され、いずれ精神が崩壊する事だろう。

「主！これ以上の行為は逆にエリス殿の心を傷付けると何故分からないのですか！？」

ゼロに言われて気づく。

感情の高ぶりのせいか僕の周りから『力』が溢れ出ている。
そして僕の手を握るエリスさんの手が若干ながら震えている。

「昌さん……」

僕が恐いのにも、それでも離さない手に僕はエリスさんの愛しさを感じた。

「ごめん……」

『力を』抑えるとエリスさんと他の血行が元通りになった。

「これ以上邪魔しないでね。じゃないと解るよね……?」

無言の圧力を掛けると全員揃って縦に頷いた。

「此処から離れよう」

そう言っただけ僕らはその場から去った。

創造主の異世界旅行 17話（後書き）

中二病乙ww

創造主の異世界旅行 18話

あれ以降、キザ野郎パーティの皆さんとは会っていない。
どちらかというアッチが避けている様に感じられる。

総パーティ数32。

本来は50パーティ集まるはずだったが、僕と黒髪青少年
が一人勝ちしたせいで予想より18パーティも減ったらしい。

その結果か、僕のチームと黒髪はシード扱いになったらしい。

まあ、楽できて良いけど……。

しかし、通称黒髪も僕と同じで一人で勝ち抜いて来たみたいだ。

まあ、僕が負ける訳無いけど注意しておこう。

開会式が始まるようで一気に周りが騒がしくなってきた。

調査内容はこのエリアに怪しい痕跡が残っているかどうかを調べるものなのだ。

より強い力は周囲にも影響を与えるという格言がありまして、魔力数値がほぼ無限まで続いているのだから少なからず常人で無いことが分かりるんだよ。

それがどう周りに影響を与えるか、大気中のマナを通して感じてみたいと思うよ。

元は純精霊。

元は自然の一部、周りのマナと同化させる事により些細な違和感などに敏感になる。

「ん〜。マナ自体の性質が変わってる……?」

マナを感じ取った。

確かにマナだけど、なんか微妙に性質が変わっているように感じられる。

質は違うけど、マナという認識で当て嵌まっている。

なんか……。

違和感を感じるけどそれが当たり前の様に感じられる。

別のマナという要素が加わった……。

マナだけどマナじゃないそんな感じ。

違和感があり、ハッキリと分からないそんな曖昧な感じ。

試しにマナを使い、魔術を使用してみようと思うよ。

「《ウィンドカッター》」

周りの木々を刻み付けながら突き進んでいく。

そして突然不可視な刃は消失した。

本来ならば、術者が止めるか、魔力切れ、色々あるがさっき起こったことはどちらでもない。

「マナの質は良いのに可笑しい……。」

マナに行使された、そんな感じがする。精霊が使いこなせないマナ

……。

どうなってるのかな？」

まさか……。」

精霊の存在がこのマナに負けてる……。」

「これは本格的に大将に伝えた方が良いね」

これを調べるため軽く周りのマナを凝縮し、宝石状の形にして持ち帰る事にした。

「ん？これは？」

足元に見たことがない植物が在った。

「データベースにも無い植物って、このマナの影響で突然変異した奴かな」

珍しい植物だし、突然変異した物だったら何か解るかもしれないので採取する事にしたよ。」

手を伸ばし引き抜こうと触れた瞬間。

「ッー!!」

身体の細胞が泡立つ。

そんな感じがした。

しかし、それは一瞬の事ですぐさま治まった。

「何だったのかな？」

とりあえず採取することにした。

そして、私は大将に報告するため一度本部に戻る事になったんだよ。
」。

しかし、さっきから身体が軽くなったかな？」

と感じるんだけど気のせいかな？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0601/>

創造主の異世界旅行

2010年10月14日15時47分発行